
へっぽこ剣士の俺が、チートな彼女を装備する

悠久剣士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

へっぽこ剣士の俺が、チートな彼女を装備する

【Nコード】

N9141X

【作者名】

悠久剣士

【あらすじ】

幼馴染のフェルミは「私と契約してください」と、剣士アルの『鎧』として冒険に旅立つことを望んでいた。異世界『ウェディング』では、未婚の女性たちが、契約者と呼ばれる刻印を持つ者の武器や鎧となって、モンスターと戦っている。騎士の血統を継ぐフェルミは、剣士アルに勿体ない凄い『鎧』だった。軽防具での戦闘を得意とする剣士アルは、幼馴染の願いを聞きいれて契約を交してしまっただ…。

物語の舞台となる『ウェディング』では、男が契約者となり、女の

子たちが武器や防具になって、モンスターと戦います。当然、回を重ねる毎に主人公の装備は、充実してくるのでハーレム展開が予想されます。主人公はチートではありませんが、装備される女の子たちがチート級の凄さ（可愛さ）で補ってくれると思います。基本的に、装備その他の【描写がエロい】と思いますのでR15指定とさせて頂きます。

設定資料【随時更新】

最新話更新時に変更点があれば、設定資料も更新されます。

■ 契約者（登場順）

【名前】 アルフレッド・S W・ライダー

【刻印】 右手の甲『S W』：剣士

【スキル（ はシャーロット装備時のみ発動可）】

「風」 剣技ハヤブサ

「風」 剣技ジャックナイフ

「」 剣技インクリースナイフ（増えるナイフ）

「」 剣技リターンズオータア（仏壇返し）

【契約の防具】

兜：

鎧：フェルミ・A r・オシリス「魔法耐性／全属性攻撃耐性／毒・麻痺無効」

脚：

盾：

籠手：

アクセサリー：

【武器：剣】

「剣」 轟くC W W

「剣」 疾風シルフィーネ零式「不可視」

「剣」 シャーロット・S W・ライダー「魔法吸収／体力吸収／魅惑／幻獣召喚／即死効果」

【名前】 エラハイ・A r c・ヒットマン

【刻印】 右手の甲『A r c』：弓使い

【スキル】

「風」剣技ハヤブサ

「風」体技トルネードウォール

「水」弓技シャッフル

「水」弓技レインマスター

「水」弓技レインボーマスター

【契約の防具】

兜：

鎧：

脚：ナルル・L a g・ヒットマン「神速」

盾：

籠手：エイミー・B r a・バラモン「吸血」
アクセサリー：

【武器：剣／弓】

「弓」ユング・A r c・ノイエガ「開発中」

【名前】カイン・H e・フオンダ

【刻印】右手の甲『H e』：英雄

【スキル】

「火」体技ファイヤ

「風」剣技ハヤブサ

「風」剣技ジャックナイフ

「水」体技ウォーター

「土」体技ニードルタックル

【契約の防具】

兜：

鎧：モーリ・A r・バレキオス「開発中」

脚：

盾：マーシャ・S h i・ガンティ「耐忍ぶ」

籠手：

アクセサリ：

【武器】 剣／大剣／斧／槍／弓】

「剣」無名の刀

「剣」リリイ・S w・ブランドン「毒／魅惑」

【名前】 ビンセント・W a r・フオーク

【刻印】 右手の甲『W a r』：戦士

【スキル】

「？」不明

【契約の防具】

兜：契約の装備「不明」

鎧：契約の装備「不明」

脚：契約の装備「不明」

盾：契約の装備「不明」

籠手：契約の装備「不明」

アクセサリ：

【武器】 剣／大剣／斧】

「大剣」契約の装備「不明」

■ 契約の装備（契約者順）

【名前】 フェルミ・A r・オシリス

【契約】 アルフレッド・S w・ライダー

【血統】 父：騎士／母：槍

【刻印】 胸の谷間：鎧

【特徴】 純白の鎧／金髪／碧眼／頑固／安産タイプ

【名前】 シャーロット・S w・ライダー

【契約】 アルフレッド・S w・ライダー

【血統】 父：魔法使い／母：剣

【刻印】 右脇の下：魔法剣

【特徴】 薄紅色に輝く魔法剣／剣技トップランカー／清纯／強がり

【名前】 ナルル・L a g・ヒットマン

【契約】 エラハイ・A r c・ヒットマン

【血統】 父：剣士／母：剣

【刻印】 左足の甲：脚

【特徴】 灰色のレギンス／慎み深い／良妻賢母

【名前】 エイミー・B r a・バラモン

【契約】 エラハイ・A r c・ヒットマン

【血統】 父：魔法使い／母：籠手

【刻印】 両腕：籠手

【特徴】 青白く輝く籠手／エロい／お姉さんタイプ

【名前】 ユング・A r c・ノイエガ

【契約】 エラハイ・A r c・ヒットマン

【血統】 父：不明／母：不明

【刻印】 うなじ：弓

【特徴】 深緑の弓／童顔／男性恐怖症

【名前】 モーリ・A r・バレキオス

【契約】 カイン・H e・フォンダ

【血統】 父：旅人／母：弓

【刻印】 胸の谷間：鎧

【特徴】 真紅の鎧／コギャル／女王様タイプ

【名前】 マーシャ・S h i・ガンティ

【契約】 カイン・H e・フォンダ

【血統】 父：戦士／母：盾

【刻印】 左鎖骨：盾

【特徴】 ピンクの盾／変質者／M嬢

【名前】 リリイ・Sw・ブランドン

【契約】 カイン・He・フォンダ

【血統】 父：剣士／母：剣

【刻印】 右掌：剣

【特徴】 藍色の剣／元盗品／礼儀正しい／カインより年上

【名前】 ミリアム・Sw・ハイム

【契約】 未契約

【血統】 父：剣士／母：盾

【刻印】 右掌：剣

【特徴】 ??? 剣／級長／世話焼き／メガネ

■ 登場したモンスター（強さ順）

【森】 リーフ・オーク

【森】 アーチャ・オーク

【森】 アーチャ・ゴブリン

【草】 グラスマン

【草】 プリースト・グラスマン

【草】 マスター・グラスマン

【人】 盗賊

【魔】 魔界騎士

【魔】 魔王（?）

盗賊・山族・海賊などは、モンスターと同じ扱い（殺しても可）。

■ 契約者の刻印 契約の装備装着可

【剣士】 右手の甲『S W』 【武器：剣】

【戦士】 右手の甲『W a r』 【武器：剣／大剣／斧】

【英雄】 右手の甲『H e』 【武器：剣／大剣／斧／槍／弓】

【弓使い】 右手の甲『A r c』 【武器：剣／弓】

■職人及の刻印 契約の装備装着不可

【旅人】 左手の甲『T r』 【逃げ足】

【鍛冶屋】 左手の甲『B l a』 【装備への特殊効果付加】

【調理師】 左手の甲『C h e f』 【食材鑑定／神の味覚】

【マメ知識】

■ウエディング（惑星）の赤い月は恒星で、ウエディングの太陽は衛星です。ざっくり地球の太陽が月で、月が太陽と考えると良いでしょう。ほかにも2つの月（衛星）があり、物語の重要なキーワードになるので覚えておくとい良いでしょう。

■作られた武器は、『疾風シルフィーネ零式』『不可視』のような特殊効果が付加されている装備もありますが、新たな効果が付加されたり、成長することがありません。また作られた武器は、契約者の力量のみを反映します。

■契約の装備は、特定の条件を満たせば特殊効果を覚えます。ただし魔法使いの血統ではない場合、エイミーの「吸血」のような魔法系の特殊効果は付加されません。また契約の装備は、契約者の力量を超えた力を発揮することが可能です。

■魔法使いの血統とは、父親が魔法使いの場合、息子が『魔法使い』『旅人』になります。魔法使いの父親以外からは、絶対に『魔法使い』の契約者が誕生しません。また魔法使いの娘は、魔法系の特

殊効果が付加された状態で契約できるので、契約者から珍重されています。このような理由から魔法使いは、希少性の最も高い刻印となっています。

私と契約してください

「私は、凄い『鎧』なんだから・・・」

幼馴染のフェルミは、冒険に出ることに二の足を踏んでいた俺に、契約を申し込んできた。返事に窮する俺に「私と契約してください」と、再び申し込んできたのは、16歳の誕生日を迎える一カ月前のことだった。

求める者アルフレッド・S W・ライダー、汝は守りし者フェルミ・A r・オシリスのこと、その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？

これは、愛し合う男女が神に誓う、永遠の愛の言葉であり、愛する者に誓う愛の言葉だ。そして俺が16歳の誕生日に、幼馴染のフェルミ・A r・オシリスと交す契約の言葉でもあった。

「ち、誓います」

俺は、集まってくれた大勢の友人や親戚の前で、結婚式の予行演習のような幼馴染との契約の儀式に、少し照れくさい気分になった。緊張のあまりに上擦った俺の誓いは、滑稽だったようで会場にいる友人が「本当に誓えるのか？」と、からかったりした。

「ち、誓いますよ、本当に誓いますから、神父様、契約を続けてください」

守りし者フェルミ・A r・オシリス、汝は求める者アルフレッド・S W・ライダーのこと、その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、

真心を尽くすことを誓いますか？

「誓います」

フェルミは、背筋を伸ばし凜として俺に忠誠を誓った。浮ついた俺とは、対照的な宣言の唱和に、会場にいる俺の親戚筋が顔を赤らめた。

爵位を持つオシリス家の御令嬢と、鍛冶屋を生業にしてきた我がライダー家の長男には、生まれ育ちの差があるのだ。俺と彼女が不釣り合いなことくらい、ウチの親戚筋も解っていたことだ。

では、誓いのキスを

宣言の続いて、このイベントが控えていたので俺は、先ほどから平常心を保てなかったのだ。

「えーと、どこにキスすれば・・・」

「ここです」

フェルミは、ウェディングドレスを模した純白のドレスの胸元を下げると、あらわになったデコルテ部に人差し指を突き立てた。

鎧属性のフェルミとの契約の刻印は、ふくよかなバストの谷間に描かれていた。無印のペンタグラムは、彼女が清らかな乙女の証であり、未契約の鎧を示す証だ。

「皆が見てるんだから、早く済ませてよ」

「う、うん」

俺は、大勢の列席者に見守られる中、幼馴染の胸元に俺の所有物である証を刻むことになる。初キスとしては、大胆過ぎる場所だ。

chu! smooch!

フェルミのペンタグラムには、光り輝く『Al（alfredo）』が刻印され、その刹那に俺の胸板にも、同様のペンタグラムが描

かれたはずだ。正装で着飾った俺の刻印は、見る事ができないものの、焼印を押し付けられたように熱い痛みを感じたので、契約が成功したことが解った。

「い、痛い・・・」

フェルミの口から思わず零れた弱音は、胸の奥をチクリと刺した。彼女も同じ痛みには耐えていると考えると、切ない気分になる。

我、神の名において、剣士アル・S W・ライダーは、守りし鎧の乙女フェルミ・A r・オシリスの正式な所有者と認めます。ご列席の皆様方も、破られぬ契約により、二人の冒険を見守ることを誓います。

神父は、胸を押さえて苦しんでいる俺たちに近付いて、肩を抱いて列席者に拍手を求めた。古い教会の神父にとっては、日常の出来事なのだろうが、契約初体験の俺には、流れ作業の様な儀式が見世物みたいで気に食わなかった。

「なあフェルミ、こんな恥かしいのなら、二人だけで契約を交せば良かったな？」

俺は、顔を真っ赤にしてうつむいている彼女に、神前式で契約したことを詫びた。そもそも俺は、格式ばった神前契約なんて望んでいなかったのだが、ウチの両親がオシリス家の爵位に配慮して、押し進めた契約式だ。

「うつん、アルのご両親が気を使ってくれた神前契約よ、とても嬉しいわ」

「そ、そうか」

「それに、友達の顔を見てよ」

俺とフェルミが顔を上げると、先ほどまで好奇心な目で、契約の刻印を見つめていた友人たちは、立ち上がって拍手で迎えてくれた。

「そうだな、初めての契約なんだから、皆に祝福してもらって、良かったのかもしれないな」

「・・・私は、初めてじゃないよ」

「えっ？」

「これが最初で最後の契約だもん」

教会の広場では、芝生に白いステージが作られており、一段高い場所に座らされた俺たちは、再び見世物状態にされた。

大人たちは、主役である俺たちと無関係に、社交辞令のようにお互い体に刻まれた刻印を見せ合い、自分たちの冒険談に花を咲かせていた。

「私の両親は、もともと契約者だったのよ」

「フェルミのお父さんは、騎士だったよね・・・お母さんは？」

「お母様の属性は、ランスで刻印が右肩にあるわ」

「ランスか・・・ずいぶん勇ましいお母さんだね」

「アルは、私が武器の方が良かった？」

「フェルミは、性格もお堅いし、鎧の方が似合ってるよ」

「性格がお堅いって、それ褒め言葉かしら」

「鎧なんだからカタイは、褒め言葉だろう」

俺たちの住んでいる世界『ウエディング』では、10歳を過ぎた頃になると、体の何処かに刻印が浮かび上がる。男性は、左右どちらかの手の甲に刻印が浮かび上がるものの、多くの者は、意味を持たない旅人『Tr(Traveler)』の刻印が刻まれる。

そんな刻印には、稀に英雄『He(Hero)』、騎士『Kn(Knight)』、魔法使い『Ma(Magician)』など、街の外に蠢くモンスターたちと戦うために、有効な刻印が刻まれる者がいる。彼らは、人々から契約者と呼ばれ、各々の活躍によって栄誉ある爵位が与えられる。

女性の刻印は、体の何処かに武器や防具を意味するペンタグラムが浮かび上がる。先ほどフェルミの母親が右肩に現れた刻印が『ランス』を意味していたように、胸元の刻印が『鎧』などが、その例えだ。女性の刻印には、男性の『Tr』に当る凡庸なる刻印が存在

しないと考えられている反面、男性の刻印が生涯消えないのに対して、女性の刻印には色々な制約があった。

例えば母親になったときは、刻印が消え去ってしまい、その効果を永久に失うことになる。フェルミの母親が「ランスだった」と過去形で紹介されたり、契約式に参加している大人たちが、過去の冒険談に花を咲かせているのは、そのためである。

もう一つの大きな制約は、契約者の男性の『死』が、武器であり防具である彼女たちの『死』を意味することだ。彼女たちの『死』が、契約者の『死』を意味しないことから、非常に理不尽な制約だが、それでも多くの未婚の女性たちは、長い人生に一度くらい契約者との冒険を望んでいた。

「フェルミとの契約は、俺にとって大金星なんだけど、本当に俺で良かったのか？」

「・・・なんで、そんなこと聞くの？」

「剣士の刻印『SW（Swordsmen）』は、義父おとうさんのように『騎士』でもなければ、まして『英雄』でもない。フェルミのような優秀な『鎧』を身に付けるほど、価値のある刻印じゃないだろう？」

俺のミドルネーム『SW』は、剣士の刻印を持つ契約者を現していた。

「クラスには、確かに英雄や騎士の刻印を持つ男の子もいたけど・・・汗臭い男の子の『鎧』なんて、想像できる？」

「あつ、なるほど・・・けど、俺も年中サウナ状態の鍛冶屋の息子だし、汗臭いと思うよ」

「アルは、小さい頃からの友達だし、ちょっとなら我慢できるよ」
今日の俺は、風呂にも浸かって正装もしており、小綺麗な格好をしているが、普段の俺は、けて風呂好きの綺麗好きというわけではなかった。同級生に先んじて希少な『鎧』を手に来たので、彼女の「契約してください」との申し出を断る理由は、見当たらない

った。

さて、お集まりの皆さんご注目ください。この度、晴れて冒険の旅に出ることになりました、若い二人の門出に際して、ここで初となる共同作業を行って頂きます。カメラをお持ちの方は、檀上の傍に寄って頂いても、結構でございます。

司会を務めていた俺の親戚は、当事者の許可も取らずに、冷やかに半分の友人をステージの前に整列させた。

「キゝスしろ！ キゝスしろ！ キゝスしろ！ - -」

会場の誰ともなく音頭を取って、キスコールが沸き起こった。奴らの目当ては、フェルミを『鎧』に精製する一瞬、衣服が透けて素肌を晒す、そのタイミングをカメラに収めることだ。

俺は、フェルミを皆の視線から避けるように、後ろに隠してから、彼女の胸の刻印にキスをした。

胸の刻印は、焼けるような痛痒さと、鉄が焼け焦げるような匂いがした。

「オヤジの鍛冶場も、似たような匂いがしたっけ」

フェルミのペンタグラムに描かれた『A1』が輝いて、衣類が透けて虚空に消えた。最初の精製は、身を引き裂かれる痛みを伴うと聞いたことがあったが、彼女の苦痛に歪む表情を見ると、俺の痛みなんて、大したことが無い我慢できる。

「い、痛い・・・はじめてが、こんなに痛いなんて、誰も教えてくれなかったよ」

フェルミの体が完全に消えて、代わりに俺の正装の上に現れた『純白の鎧』は、まるで騎士物語に出てくる勇者の装いだった。

「これは、見事な『鎧』ですなあ・・・さすがオシリス家の御令嬢だ」

鑑定士の刻印『Ju (Judgment)』を持つ初老の男は、彼女の父親が招いた古い友人だ。

「いえいえ、まだ見かけ倒しの子供ですよ」

「どれ、私が鑑定してみましよう」

鑑定士は、鎧を身に付けた俺の傍まで来ると、手に持った杖を振り上げて「仕えし契約者との命約、守りし者の力を我に示せ・・・」と、呪文を唱えた。彼ら鑑定士は、魔法使いのなりそこないだと、聞いたことがあった。

「私の見立て通り、とても優秀な『鎧』ですぞ。魔法耐性がトップクラスで、火、風、水、土の全攻撃耐性も付いている。毒と麻痺の無効化は、冒険の心強い友となりましよう」

「ふむふむ娘の頑固なところは、『鎧』になっても相変わらずだな」娘を褒められたオシリス卿は、機嫌を良くして口髭を撫で回していた。

「なあフェルミは、凄い『鎧』らしいよ」

俺は、自分の胸元に話しかけた。

「うん・・・私は、凄い『鎧』だって言ったでしょう」

「そつえば、言ってたね」

「私、重くない？」

「いいや、重たくないよ」

剣士の俺に不釣り合いな重厚な『鎧』は、たぶん騎士の血統によるものだろう。本来、軽装備で戦うことを得意とする剣士には、不釣り合いな気がした。

「本当に？」

「本当だよ」

「本当に、重くない？」

「そつだな、もう少しダイエットした方がいいかも・・・」

「重いじゃん！ 私のこと重いと思ってるじゃん！」

だって、何度も確認するから「重い」と答えてほしいのかと思っただよ。

冒険に旅立つことを躊躇っていた俺も、これだけ盛大な契約の儀

式を執り行ったのだから、今さら旅立たない言い訳も出来なくなつた。

フェルミが盛大な契約式に応じた理由は、俺の背中を押すためだったのかなと、彼女の心情を勘ぐったりしたけれど、もう引き返せない後の祭りだ。

「俺たちの冒険の目的は、自分探しってことでいいよね？」

「駄目です、却下です。男の子なら、もっと大きな目標を持ってください」

「ならば、隣町に薬草を買いに行こう」

「それも却下です」

「フェルミが俺と契約した目的は、いったい何なのよ」

「魔王を倒して、世に名声をあらわすためです」

「えええ！　魔王討伐が目的なら英雄とか、騎士とか、もっと適職の契約者を探せば良かったじゃないか」

「それでは、彼らの手柄になってしまつてしまうでしょう？」

「それって・・・」

「一介の剣士アルが魔王を討伐すれば、私（鎧）が優秀だったお蔭として、私の名声が後の世まで語り継がれましょう」

やはりフェルミは、騎士の娘だと再認識させられた。

私と契約してください（後書き）

面白そうだなとか、続き読みたいな〜って方は、迷わず『読了』で報告してください^^

私が守ってあげます

「フェルミ……悪いけど、少しだけ解除しても良いかい？」

剣士の俺には、やはり軽装備がお似合いだったようで、『鎧』の重量に力負けしていた。

「駄目です……もう少しですから、このまま頑張ってください」

「駄目、駄目って言っても……フェルミだって、息が上がっているじゃないか……本当は、もう我慢も限界なんだろう？」

『鎧』となっているフェルミとは、『死』と同じように『体力』

も共有しており、俺の足に貯まった乳酸の影響で、下半身辺りの感覚が馬鹿になっているはずだ。

「そ、そんなことないです……もう少しだけなら」

「我慢するなよ……フェルミ、もう良いだろう？」

「もう少ししたら、気持ち良くなるかも……んっ」

「あっ！……もう駄目かも……もう出ちゃうよ」

俺は、急な斜面に片膝をついて立ち止まると、体を前に倒して『鎧』を解除してしまった。ペンタグラムが輝くと同時に、俺の上半身からヌウーと、フェルミの体が出てきた。

「バカ！ バカ！ バカ！ もう少しでイケたのに」

急に解除された彼女は、俺と向き合う形で抱っこされている。彼女は、剣士の俺に合わせて軽装な衣服に身を包んでいたが、その豊かなボディまで軽くなるわけじゃなかった。前屈みに彼女を抱えている体力は、今の俺に残っていないので早く離れてほしかった。

「我慢できなかった俺も悪いけど、やっぱり無理があるよ」

「却下です。私は、アルが耐えてくれれば、我慢できましたよ」

「ウソだよ、フェルミだって苦しそうな声出してたよ。あはーんとか、うふーんとか、気になって前に進めないよ！」

「わ、私が、そんな妙な喘ぎ声を漏らすはずないでしょう！ な、

なんで私が、アルに抱き着いて、あはーんとか、うふーんとか言うわけ？」

日が暮れて三つの月が地上を照らし出してから、三度目の口喧嘩の理由は、他愛もないことで始まった。フェルミがやらしい声を出すから、俺の気が削がれた？ そんな馬鹿な理由で、『鎧』を解除する訳がない、冗談を言ったただけなのに。

俺たちは、初めて冒険に出る若者に必ず課せられる、儀式『First night』に参加していた。半人前のまま冒険者として旅立った若者が、志半ばにモンスターの餌食にならないように、契約者の体力や、武器や装備との相性を再確認するために行われている儀式だ。

街から一番近い神殿までの道程には、冒険初心者の若者が戦うのに、丁度良い加減のモンスターが生息している。神殿までに夕刻から翌日の日の出まで、辿り着ければ儀式が終了して、晴れて一人前の冒険者として、旅立つことが許されるのだ。

儀式は、一回で突破できる者もいれば、何度やっても失敗に終わる者もいる。ただ三回以上失敗した冒険者は、大抵の場合、装備側から契約者に解除（三行半）を突き付けられる。

「よお、お宅らは、新婚さん（Newlywed）？ 初夜（First night）で喧嘩しているようでは、長い冒険旅行なんて出来ないぞ」

俺たちに話しかけてきたのは、いかにもベテランの弓使い（Archer）だった。長身の男は、作られた軽装備で身を固めていたが、深い緑の『弓』と、青白く光る『籠手』は、契約で得た武器と防具に間違いなかった。俺たちは、お互いの自己紹介を簡単に済ませた。弓使いの男は、エラハイ・Arc・ヒットマンと名乗った。

「俺たちは、今日が始めての儀式なんですよ」

「ウチは、この娘『弓』との契約を済ませたばかりでね、初夜に参

加するのは、三度目なんだよ」

「へえ、装備を変える度に、儀式に参加するんですか？」

俺は、無知をひけらかしてしまったようで、フェルミは「この剣士は、常識を知らないのよ」と、慌てて俺の口を塞いだ。鍛冶屋を継ぐつもりだった俺は、冒険関連の授業なんて、昼寝の時間だと思っていたし、今現在をもっても、あまり前向きな気持ちではない。

「いいんだよ、知らないことを尋ねるのも、冒険者に必要なことだよ。それよりも、彼女を紹介しておくれよ？」

エラハイは、俺に寄り添って警戒しているフェルミを指差した。

「彼女は・・・」

フェルミは、俺の『幼馴染』？ 『鎧』？ 『恋人』？ たぶん

『恋人』だと紹介したら、彼女の正拳突きが飛んできそうだ。『鎧』だと紹介するのは、彼女を物扱いしているみたいで気が引ける。

「私は、剣士アルの『鎧』です。通り名は『オシリスの完全拒絶』です」

俺は、フェルミに通り名があることを初めて知った。

「うん？ オシリス卿の娘なら、軽装備じゃないのか・・・それは、残念だった」

「そちらも、名乗るのが礼儀です」

「そうですか、永久爵位を持つオシリス卿のお嬢さん・・・いいでしょう」

エラハイは、両手を前に向けると、その先にぶら下がる女の子が出てきた。

「『籠手』のエイミーです。特技は、攻守ともに吸血効果（Suck blood）を付加できます」

次にエラハイは、右手で弓を高く上げると、その手に巻き付いた状態で幼い女の子が出てきた。

「こんばんわ・・・『弓』のユングです。えーと、特技は、まだ在

りません」

お姉さんタイプのエイミーに比べると、ユングは、まだ成人前（16歳）の子供に見える。

「エラハイさん、その二人とも素敵な装備ですね」

「アルは、気が付かないの？ その『弓』は、まだ成人してないじゃない！ 成人前の女性と契約するのは、『ウェディング契約の書』
青少年保護育成条項に違反してるわ！」

フェルミは、ユングを指差すと契約者であるエラハイを強く非難した。

「オシリスのお嬢さん、ウチは、大人の女性を愛せないんですよ。文句があるのなら、儀式が終わって一人前の冒険者になってから、意見することだな」

エラハイは、ユングのうなじに描かれたベンダグラムにキスをすると、彼女は、痛みをかみ殺す仕草で『弓』に姿を変えた。俺は、契約の痛みを思い出して、思わず自分のうなじを隠してしまった。

「あ、貴方は、変態さんですね。子供に、あんな痛みを強要するなんて・・・」

珍しくフェルミは、感情を高ぶらせている。

「初夜で喧嘩している新婚さんには、俺と所有物の関係ユングに、口出ししてほしくないね」

「坊やたちは、ほっておいて先を急ぎましょう」

エイミーの組んで腕の上下には、やはりペンタグラムが描かれていた。

「ああ、俺の可愛いエイミー・・・坊やたちには、契約者の愛の形が歪んで見えるらしい」

エラハイは、彼女のペンタグラムに舌を這わせると、青白い炎に包まれた彼女が、艶かしい叫び声をあげて、業火に焼かれる様に身をクネらせると『籠手』に姿を変えた。

「今のは、なんか素敵だ・・・」

俺は、エイミーの妖艶な契約に魅了されてしまった。

「本来ならば、少年から、『鎧』を取り上げたいところだが、お宅らの様子なら、わざわざ取り上げる必要もないだろう。お宅らは、今から街に戻って、儀式をリタイヤするんだな。ここから先は、神殿までモンスターの生息地になる」

エラハイは、街の方向を指差すと、微かに街明かりが確認できた。俺たちは、日の沈む前から、たくさん歩いたのに、まだ近くに街明かりが見えたことに、落胆してしまった。

「あ、あのエラハイさん・・・色々と教えてくれて、有難うございます」

俺は、彼にお礼を伝えると、フェルミが金切り声で「なんで！有難うなの！」と、ヒステリックに怒鳴っていた。

「少年は、良い冒険者になるだろう、お嬢ちゃんは、もう少し分を弁えないと、少年に捨てられるぞ」

エラハイは、弓使いらしく颯爽と暗がり消えて行った。

「なんで！ アルは、あんな変態さんに、有難うとか頭下げてるのよ」

「俺たち二人とも春生まれだから、同級生の中で初めての冒険者だろう？」

「だから？」

「他人の契約を見たことなかったから、すごく参考になった」

「はあ？」

「何だかんだ言っても最後は、俺たちのこと気にかけてくれてたじゃん」

俺は、エラハイとエイミーの契約を思い出すと、ちょっと羨ましく感じた。彼らの契約に比べれば、俺とフェルミの契約なんて、子供のお遊びだ。

「彼は、同じ軽装備が適職だから、剣士に仕える装備を奪おうと近

付いてきたのよ」

「えっ、エラハイは、盗賊だったの？」

「アルは、彼の何を観察してたのよ？」

「えーと、契約方法がカッコイイなと」

フェルミは、顔を手で覆い隠すと、情けないと言わんばかりの大きな溜息を吐いた。

「カッコイイとか言ってる場合？ 私たちは、まだ痛みにも耐える段階でしょう？」

「けど、ベテランのエイミーだって、痛そうにしていたし、抑えられない痛みなら、もっと楽な契約姿勢を考えるとかさあ、楽しみを見つけてもいいじゃん」

「例えば・・・どんなポーズよ」

フェルミは、俺の力説に話を聞く耳を貸してくれた。ちなみに今の契約方法は、胸を肌蹴た棒立ちの彼女に、俺が申し訳ない顔をして刻印にキスをしている。解除方法は、前述のとおり彼女を向き合った形で抱っこしている・・・そうだな、駅弁売りと駅弁みたいな格好だ。あれが、じつに情けない格好で、知り合いの前で解除した日には、三日ぐらい立ち直れない。

「エラハイは、なんか格好良くに二人を出し入れしてたよ」

「私たちも経験を積み、出し入れも様になるわよ」

「そうかな？」

「あのね、あの娘たちの刻印は、腕とか、うなじなのよ・・・私の刻印は、そ、そのオッパイでしょう・・・比べるまでもなく、私たちの勝ちじゃない」

「フェルミだって拘る部分があるじゃないか？」

「・・・『鎧』として誇りはあります」

「そろそろ疲れも取れたし、練習を兼ねて契約しようか？」

と、俺は言う、フェルミを右手で抱きかかえて、左手を天高く

伸ばした。

「我は汝の契約者にして、誓いを守る者アルフレッド、神の名において……」

「ちょ、ちよつと、その呪文みたいな詠唱は、いったい何なの？それと左手を突き上げている理由を説明しなさいよ」

俺たちの契約に呪文が要らないのは、エラハイたちの契約を見ていれば、理解できたと思う。

「だから、雰囲気作りだよ」

「格好悪いし、笑っちゃうから却下です」

では、改めて右手で抱き寄せた後、左手でフェルミの顔を支えた。俺は、彼女の喉元に舌を這わせると、胸元の刻印に向かって白い肌を舐めた。

「ちょ、ちよつと、くすぐったいから止めてよ」

「エラハイだって、エイミーの腕を舐めてたじゃん！ 少しぐらいくすぐったいのは、慣れれば気持ち良いから我慢しなよ」

「駄目です。友達に見られたら、私が欲求不満だと思われるちゃう」
フェルミには、エラハイの契約をパクるのを禁止された。

仕方がないので、支える仕草からやり直すと、少し乱暴に彼女の襟元を引き下げた。

「出ですよ！ オシリスの完全拒絶！」

鉄の焼ける匂いと焼ける痛みは、ちつとも緩和されなかったが、契約時に叫ぶのは、痛みを紛らわすのに効果的だった。それに夜闇のせいなのか、いつもより白炎が倍以上立ち上がった気がする。

「今のは、成功じゃないかな？」

純白の鎧は、相変わらず重たかったけれど、格好良く契約出来た俺は、このまま神殿までイける気がした。

「……」

「フェルミ、どうしたの？」

「乱暴に服を下げないでよ、オッパイが見えたので、却下です」

「ええー、一連の動きがカッコイイのに」

「アルの格好付けたい気持ちには、理解できるけど、私たちのやるべきことは、もつと沢山あるでしょう？」

「解ったよ、衣服を肌蹴るのは、フェルミの仕事で良いよ・・・」

「解ってくれば、いいです。私たちも神殿に向かいましょう」

フェルミに尻を叩かれた俺は、腰に携えた既製品の剣に手をかけて、コンパスを確認した。

「赤い月を目指して歩けば、神殿に辿り着けるはずだ」

一步を踏み出した俺は、街を出てくるときのオヤジの忠告を思い出した。雑魚のモンスターは、仲間を集めて狩りをするから、森で長い時間足を止めれば、奴らに囲まれてしまう。迂闊だった。

体毛に覆われたモンスターは、身長二メートルくらいで、大小様々な木の棒を持っていた。数は・・・先頭に三匹、後方にも何匹か気配がした。

「まいったな・・・」

俺が剣を鞘から抜くとフェルミは、柄つかしか見えないので驚いたようだ。

「その剣は、なんで柄つかしかないの？」

「この剣・・・疾風シルフィーネ零式の棒ぼう樋ひは、不可視魔法で見えないんだ。ウチの鍛冶屋で一番トリッキーな剣を頂戴してきたんだぜ」

刃長二・五メートルの疾風シルフィーネ零式が、なんで七十センチの鞘に納まっているのかなど疑問は、尽きないけれど、その辺も含めて相手の虚を突く、真正銘の魔剣ってやつだ。

飛びかかってくる猿どもは、俺の間合いに入った瞬間にぶった切ってやるぜ！

「アルのこと、私が守ってあげます・・・」

フェルミの声は、少し震えていた。初めての实战だ、怯えるのも無理はない。

「頼んだぜ・・・」

剣士の俺の声も、震えていただろう。けどな、俺の震えは、武者震いってやつだけだな！

奇跡のカーニバルの開幕だ！

私が守ってあげます（後書き）

感想や読了宣言頂けると嬉しいです^^

私なら大丈夫です

疾風シルフィーネ零式の不可視には、相手に間合いを計らせない、奇襲攻撃に長けているなど利点があるものの、高難度の剣捌きが必要される曲者だ。

刃長二・五メートルを自由自在に扱うには、見えない切先の風切音を頼りに、軌道を敵に向けて戦うのだが、熟練の剣士でも自分を切り裂くこともある。

「疾風の名前が示すとおり、風を操り敵を切り裂く魔剣だ」

先頭にいた三匹のうち、真ん中の一番長い木の棒を持ったモンスターが、ゆっくりと近付いてきた。

「アル・・・あのモンスターは、リーフ・オークだわ」

リーフ・オークは、最低3匹で行動しており、冒険者を2、3集団が協力して襲い掛かってくる。知能は、五歳児並みだと言われているが、戦闘に際して当てになる情報じゃなかった。

「なんでリーフ（葉っぱ）なんだ？」

「彼らの主食が、葉っぱだからよ」

リーダー格と思われる一歩踏み出したリーフ・オークは、体毛を掻き分けてギョロリとした目を向けた。白目のない瞳は、獣特有の鈍い輝きを放ち、突き出した顎から零れ落ちる唾液は、草食のモンスターと思えなかった。

俺は、リーダー格のリーフ・オークの足元に切先を忍ばすと、漁師の一本釣りが如く、股の間から脳天まで一気に切り裂いた。

「悪く思ふなよ、子豚ちゃん！」

と、ここまでは、計画通りだったのだが、振り上げた剣は、勢い余って俺の背中をガツンツと叩いた。

「んっ！」

フェルミが衝撃に驚いたのか、小さな呻き声をあげた。

もしも疾風シルフィーネ零式が片刃でなかったら、フェルミの『鎧』に大きな傷跡を残すところだった。

「す、すまない！」

リーダー格を失ったリーフ・オークたちは、ブイヒイブイヒイと豚のような鳴き声をあげると、後退りするように森の闇に消えた。

圧倒的な戦力差を見せつけられた奴らは、俺たちに恐れをなして敗走したのだ。

「さつき背中に剣当てて・・・ごめんな」

俺は、初のモンスター退治が成功すると、奴らの右手から小指を切り落として、懐に入れてあった小瓶に詰めた。

冒険者たちは、モンスター退治を行った証拠に、教会に決められた戦利品（部位）を街に持ち帰り、その教会で換金をして生計を立てている。

先ほど退治したオーク系の戦利品は、右手の小指だった。

「ねえアル、その剣だけど、ちゃんと使えるの？ もっと自分に合った剣で、戦った方が良くないかしら？」

疾風シルフィーネ零式は、先ほどの戦いで初めて使った。正直に言えば、剣士の俺でさえ、あまりのじゃじゃ馬ぶりに、この剣で戦うのを遠慮したいと思った。

「ウチの鍛冶屋では、一番の業物わざものなんだけど、俺の実力レベルでは、まだ装備できる剣じゃない」

俺は、背中に差していた小太刀を取り出すと、目の前の切株に置いた。

「その剣は？」

「これは、俺に剣士の刻印が現れたとき、オヤジが打ってくれた最初の剣、轟くCWW（Cold winter wind）だよ・
・戦利品を剥ぐのに、持ってきたんだけど、こいつを主要武器メインウェポンに換装しておこう」

「神殿までは、まだ距離があるのよ」

フェルミは、初心者用の剣と聞いて、不安を覚えたようだ。

俺は、疾風シルフィーネ零式を背中の中と、腰のフォルダーに轟くCWWを収めてから立ち上がった。そして体制を低くすると、切株の横にあった若い針葉樹の幹に手を当てて、轟くCWWを鯉口から浮かせた。

フォオオ！と、地を這うような風音がして、針葉樹の幹に左から三本、右から二本の切り傷を付けた。

「もしかして、今五回攻撃したの？ 風音は、一回しか聞えなかったのに？」

「これで安心した？」

「うん、その剣も凄いよ」

「安心したなら、先を急ごう」

フェルミを安心させるために披露した技は、轟くCWWの性能ではなく、剣士のスキル（刻印の力）『剣技ハヤブサ』を発動させたものだった。彼女の前では、剣士のスキルを発動させたことがなかった。剣の性能だと勘違いしてくれた。

フェルミは、俺の腕前を信用していないところがあり、強い装備を持参していると思わせた方が、納得するだろうと思った。

赤い月が頭上まで昇ると、夜明けまで12時間となった。太陽の周回軌道の真下に近い森では、夜闇が20時間以上続く。太陽が周回軌道？ これは、ウェディングと地球の違いを知らなければ、意味の解らない話だろう。

異世界ウェディングには、大小四つの月があるが、最も大きく二番目に明るいのが赤い月だった。そして特筆すべきは、この赤い月がウェディングの衛星ではなく、赤い月の軌道上にウェディングが存在しており、つまり赤い月は、死滅に近付いた太陽の成れの果と

いうことだ。

では、ウェディングの太陽は？ 夜闇に姿を消している一番明るい衛星が、大地を照らす太陽なのだ。ウェディングの昼夜は、太陽が周回軌道を回る衛星なので、ウェディングの自転速度に比例して一定であり、地方毎に決まっている。

太陽の周回軌道から離れるほど、昼が長く夜が短い、周回軌道の直下では、昼と夜の比率が同じである。それが人々の生活だけでなく、夜闇を好むモンスターの生息地も限定していた。

最も長く夜闇に包まれる太陽の周回軌道の直下は、モンスターを支配する魔王の土地『Land of Adventure』となっており、南半球には、俺たちが住んでいるサウスフィア王国がある。冒険者たちの究極の目的は、魔王を討伐して、北半球を含めた地上の覇権を手にすることだ。

もちろん北半球にも人間が住んでいるが、小国同士の戦争が絶えない北半球には、魔王の土地に挑むような冒険者がいない……らしい。

契約者や装備となつてモンスターと戦う冒険者は、『Land of Adventure』でモンスターを退治して、人間の住める安全な土地を開拓すること、北半球に住んでいる人々と商業的交流を絶やさぬこと、その他様々な目的で冒険の旅に出ている。

俺たちは、あれから一匹もモンスターに出会うことなく、神殿が見えるところまでたどり着いた。

「神殿までの距離も残すところ、あと数キロだな……ふう」

現金なもので、少し前までフェルミの『鎧』が重いと文句を言っていたのに、神殿が見えた途端、足取りが軽くなった。

「冒険者に守られた街の近くの森だから、モンスターの生息数も少ないと思うけど、『初夜』にしては、手応えがないわね」

フェルミの言うとおり、ただ神殿に向かって歩くだけなら、毎年リタイヤする者が出るはずがなかった。確かに、手応えがなさ過ぎ

だ。

「このままゴールすることも出来るけど、それで「明日から冒険者です」と言われても、ピンと来ないね」

俺は、儀式の意味について考えた。

このまま儀式が終了しても、冒険者として旅立つ心構えが身に付くだろうか？ 彼女を上手く使いこなしていけるだろうか？ それらを試されるのが『初夜』だとすれば、俺たちの旅路は、口喧嘩とオーク一匹倒しただけに過ぎない。

「リーフ・オークの戦利品を増やさない？」

このまま終わりたくない、フェルミも俺と同じことを考えていたのだろう。

「戦利品一個では、騎士のプライドが許さないのかい」

「それもあるけど、せっかくだから私たちの力を試みましょうよ」

俺は、足の疲れを取るために、ちょうど休憩したかった。先ほどのオーク程度なら、轟くCWWでも剣士のスキルを発動すれば、十分に戦えるだろう。

「ここで火を起こして休憩すれば、またリーフ・オークが現れるに違いない」

俺は、足元に堆積していた枯葉を足で掻き集めると、その从小枝を拾い集めて、枯葉の上に井形を組んだ。そこに襟元から取り出したマツチ擦って放り込むと、火が次第に大きくなった。

「あら、ずいぶんと手際が良いのね」

「剣技の修行で森には、オヤジとよく来ていたからね」

「ちゃんと、修行してたんですね」

「刻印が浮かんだ頃は、頑張ってたんだ。俺にも、人並みの才能があったんだと・・・」

ウチは、代々鍛冶屋の刻印『Bla（Blacksmith）』を受け継いでおり、俺にも『Tr』か『Bla』の刻印が浮かぶと

思っていた。

たぶん剣士の刻印は、右掌にペンタグラムが描かれていた母親の血筋なのだろう。本来は、男性の血統が受け継がれるが、稀に母親の血統を継ぐ者が生まれる。ただし、母親の影響を受けた契約者は、刻印の力を上手く扱えないと、教会の研究者が言っていた。

フェルミが優秀な鎧なのは、何世代も続くオシリスの『騎士』の血脈で、刻印の力が洗練されたからだ。

「人並みの才能では、私が困ります」

「フェルミは、魔王を討伐して名を挙げるんだもんね」

「そ、そうですね・・・私が認めたアルは、そんな弱音を吐いたら駄目です」

「解ったよ」

俺は、自分の体を抱きしめた。

冷たいはずの純白の鎧は、焚火のせいで人肌の温もりに感じた。

「ちょ、ちょっと、恥かしいから・・・」

照れるフェルミは、すごく可愛いと思った。

人間の彼女を抱きしめたら、強い口調で拒絶するだろうが、今は『鎧』だから離れられない。

「少しでもいいから、抱きしめていたいんだ」

「少しでもですよ・・・せっかくの純白の鎧が、汚れちゃうから」

「少しだけ黙ってよ」

俺は、何時間でも自分を抱きしめていたかった。

ペキッ

そろそろ良い感じに、雑魚モンスターどもが集まってきた。木々の暗がりには、赤い月を反射した瞳が、何個も浮かび上がっている。リーフ・オークは、なかなか暗闇から姿を現さなかった。たぶん

先刻の敗走したオークたちが、さらに多くの集団を率いて戻ってきたんだろう。今度は、用心深くこちらの出方を探っているのだ。

「五歳児にしては、知恵があり過ぎるだろう」

「・・・」

俺は、やつらの背後に、鍔^{やっつ}がキラリと光るのを確認した。

「アーチャ・オークは、鉄の鍔を扱えるのか？」

「・・・」

「フェルミ？」

「・・・なに、もういいの？」

フェルミは、ウツトリした声で答えた。

「一斉掃射されたら、防ぎきれないかも」

俺は、立ち上がると、轟くCWWを中腰で構えて、弓矢を叩き落とすつもりで、アーチャ・オークの攻撃に備えた。

「アーチャ・オークは、たぶん石の鍔のはずだけど・・・鉄の鍔ならゴブリン系のモンスターかしら」

「オークとゴブリンの混合パーティ、ずいぶんと厄介な組み合わせだな」

俺は、摺り足で敵との間合いを詰めながら、『剣技ハヤブサ』を繰り出すタイミングを図っていた。

木々から先兵と思われる、一回り小型のオークが顔を覗かせたが、その面構えに見覚えがあった。やはり先刻の敗走したオークの集団だった。

ブオオオオ！ 轟く風音とともに先兵の顔を切裂くと、純白の鎧が返り血に染まった。

「ごめん、フェルミのこと血で汚しちゃった」

「いいの気にしないで、初夜^{はつしや}って、そういうものでしょう？」

オークの返り血は、鎧に付着することなく、鮮血のまま俺の太腿の付け根に流れ落ちた。こんなことなら、布のパンツではなく、多少の重量負担を無視して、皮のパンツを装備してくれば良かった。下着が血に塗れて、下半身が気持ちが悪い。

「今夜は、ブヒブヒ言わせてやるからな！」

俺は、オークどもの隠れ潜んでいる暗闇に飛び込むと、特攻に驚いたやつらは、ブイヒイブイヒイブイと鼻を鳴らして、月明かりの元に逃げ出した。

俺は、無我夢中で『剣技ハヤブサ』を発動させたが、さすがに五匹からの剣速は、ハヤブサと呼ぶに相応しくないほど遅くなった。「フェルミ……五匹倒したわけだが、まだ戦利品が必要かい？」

俺は、戦線離脱を提案したが、オークたちの血を浴びた『鎧』は、俺に敗走を許さなかった。

「いま戦いを止めるなんて許さないんだから、もつと大勢のモンスターを殺^やりたいわ」

契約した装備は、戦闘により能力を開花させ、より多くのモンスターを相手にすることで覚醒する。オークとの戦闘において強い快感を得るのは、フェルミが優秀な証拠だ。

俺は、彼女に促されるまま、さらに五匹のオークの首を撥ねると、血が雨のように頭上から降り注いだ。

「ああ、アル……私、体が芯まで火照ってきたわ」

モンスターの血を浴びながら快感を得る幼馴染なんて、想像するだけで、俺の意識も持つて行かれそうだ。

「あは〜んっ」

「なんだよ！ あは〜ん、うふ〜んって言うじゃねえか！」

と、俺がフェルミの喘ぎ声に気を取られた瞬間、背後からゴブリンの弓矢が飛んできた。二本は、叩き落としたが、三本目は、右脇腹に突き刺さった。

「ひい！」

フェルミは、苦痛に満ちた短い叫び声をあげると、息遣いが荒くなった。俺は、矢が飛んできた方向に、切り落としたオークの首を投げつけると、ゴ布林たちは、ザワザワと相談して敗走を決めた

ようだ。

「だ、大丈夫か？」

『鎧』のおかげで俺まで貫通することは、なかったものの、フェルミのことが気がかりだ。彼女は、相変わらず荒い息遣いで、何も返答してくれない。

俺が『鎧』を解除すると、汗だくのフェルミを正面から抱きかかえた。彼女の右脇腹を確認した俺は、怪我一つなかったことに安堵した。

「外傷は見当たらないけど、大丈夫なのか？ 痛くなかったか？」

「すごく、きもち・・・かった・・・」

「気分が悪いのか？ 気持ちが悪かったのなら、吐いてもいいぞ」

俺は、フェルミを地面に寝かせると、水筒の水を飲ませてやった。

「アル・・・死にそうよ・・・手を繋いで・・・」

「矢が当たったくらいで、契約の『鎧』が壊れちゃうの？」

俺が手を繋いでやると、彼女は、首を大きく振った。

「私なら大丈夫です・・・戦闘が、すごく気持ち良くなって・・・」

「だって、死んじゃうって？」

フェルミは、上半身を起こして俺を正面に見据えた。

「死にそうなくらい、気持ち良かったのです」

彼女は、上気して顔を真っ赤にした。

俺たちは、月明かりの中で大きな声で笑った。

俺たちは、オークから得た十一個の戦利品を小瓶に詰めると、二人で手を繋いで神殿に向かった。

私なら大丈夫です（後書き）

ドキドキのバトル描写に仕上がったと思います。反則気味ですが^^；

私は許可しません

俺たちが神殿に着く頃には、赤い月が西の地平に沈もうとしていた。赤い月が沈んで太陽が昇るまでの数時間は、青と紫の月が淡く輝くだけの深闇しんやみの時間だ。

フェルミは、神殿の階段を軽やかに駆け上がると、頂上付近で立ち止まって、森から聞こえる儀式の参加者たちの悲鳴を聞いていた。「私たちも、もう少し遅れていたら、深闇の森で発狂していましたね」

深闇の森は、人間から視界を奪うだけでなく、夜行性モンスターたちに力を与える。

赤い月と太陽の間、深闇の中には、魔王の居城が存在すると信じられていた。深闇を追い続けて移動する城なんて、俄にわかに信じ難い話だったが、同時刻には、城の番兵と呼ばれる魔族系のモンスターが異常発生することが知られていた。

深闇の時間までに神殿に辿り着けなかった参加者は、暗闇の中で恐怖と戦っているのだ。ただ、この森にいるモンスター程度ならば、冒険者を目指すだけの戦闘力で、朝まで逃げ回っていれば、命まで落とすことはないだろう。

「フェルミ・・・どうして、そんなに急ぎ足なんだよ・・・まだ日の出には、時間があるじゃないか？」

俺は、階段の中腹で座り込むと、森に向かって耳を澄ませている彼女に、息も絶え絶えに質問した。

「どうして？ 神殿に一番乗りしたいからですよ」

「一番乗りは、オーク狩りで時間潰したから無理だと思うよ」

「では、二番乗りです」

頑固なフェルミのことだから、二番乗りを否定すれば、三番乗りと言っに決まっている。

俺は、諦めにも似た気持ちで階段を登り始めた。

俺たちが神殿の階段を登りきると、既に何人かの参加者が、思いの格好で体を休めていた。

「おやおや、坊やたちも、リタイアせずに神殿まで辿り着いたのか」
声をかけてきたのは、森の中で出会った弓使いのエラハイだった。
彼は、腰布の上に、赤黒いゴブリンの指を何十本も括り付けていた。
「あはは・・・どうにか、辿り着きました」

俺の後ろに隠れたフェルミは、エラハイに敵意剥き出しの視線を送っている。俺は、気まずさで、思わず愛想笑いをした。

「ウチは、少年の『鎧』に嫌われてるみたいだね。お嬢ちゃん、しかめっ面ばかりしていたら、せつかくの美人が台無しだよ」

俺は、エラハイがフェルミに手を伸ばしたので、その手を反射的に掴んでしまった。

「えーと、すいません・・・一応、俺の『鎧』ですから」

「盗まれると思ったか？」

エラハイは、低い声で呟くと、殺気だった目で睨み付けた。

「フェルミには、気軽に触れてほしくないと思います」

俺は、『鎧』の所有者として毅然とした態度で、彼女に触れることを拒んだ。

「なるほど、触れてほしくない」

「はい」

「坊やたちもオークの返り血を浴びて、少し成長したってか？」

エラハイは、目を瞑ると口角を上げてニヤリと笑った。

「可笑しいですか？」

「なあ、アルフレッド・・・お前に掴まれて、エイミーのやつが濡れちゃったってさ」

俺が掴んでいたのは、エラハイの『籠手』だった。

「す、すいません、エイミーさん、ごめんなさい」

俺は、エイミーの何処を掴んでいたのだろうか？

しかし、掴んだくらいで濡れちゃうのだろうか？

装備になった彼女たちにも性感帯があるのだろうか？

本当に、何処を掴んだら濡れちゃうんだろう？

「・・・」

「アル、なんか変なこと考えてますね」

フェルミは、エラハイの『籠手』を掴んだ手を見ながら、首を捻っている俺に言った。

「えっ、べつに変なこと考えてないよ」

「坊やたち、良いことを教えてやろう」

エラハイからは、殺気が消えていた。あの殺気は、盗むと疑われたこと腹を立てたわけじゃなく、俺が『籠手』（エイミーさん）を乱暴に掴んだから、怒ったのかもしれない。

「冒険者は、人前で装備を解除しない、なぜだと思う？」

「なぜですか？」

「一つ目は、解除中の装備が盗まれないため」

なるほど、解除中のフェルミの刻印に、誰かがキスをしてしまつたら、俺たちの契約が解除されてしまう。装備泥棒は、まず契約を解除してから、武器商人たちに装備を持ち込むのだ。教会は、教義の中で『汝 姦淫する事なかれ』と注意されていた。

「二つ目は、装備を逃がさないためだ」

「装備が逃げる？」

誓いを立てた装備が、契約者から逃げ出すなんて、ずいぶんと薄情な娘もいるもんだ。

「坊やたちは、この世界に武器商人と呼ばれる、装備おんなを生業にする連中がいます、聞いたことがあるだろう？ 武器商人の扱う女の子たちは、北部の貧しい農村から金で連れてこられた、器量よし（美

人)だったり、契約解除された盗品だ^{おんな}」

エラハイは、女の子の首に鎖を巻いて、奴隷のように扱っている男を指差した。

「そういう娘^こたちは、契約者から逃げたがっているのよ」

フェルミは、軽蔑の眼差しで男を睨んでいた。

「契約した装備は、奴隷じゃないだろう？」

俺は、吐き気にも似た感情が込み上げてきた。

「ウチは、エイミーやユングと、強い誓いで結ばれている」

エラハイは、俺たちに装備を解除して、ちゃんと挨拶までしてくれた。やはり、彼が盗賊だなんて、フェルミの思い過ごしだ。

「疑ったりして、すいませんでした」

俺は、フェルミの首を押さえると、強引に頭を下げさせた。彼女は、少し抵抗したものの、エラハイの話に納得した様子で「ごめんなさい」と、か細い声で謝った。

「うんうん、坊やたちは、初々しくて可愛いね」

エラハイは、出会ったときと同じ笑顔を見せた。

「フェルミさんは、騎士の『鎧』なのに、なんでアルフレッドさんと契約したの？」

装備を解除されたエラハイの『弓』ユングは、フェルミと打解けて話している。少し離れたところには、水筒をガブガブと飲み干す勢いのエイミーがいた。

「人前で契約解除をするのは、危険だと言ってなかったか？」

俺とエラハイは、森の中で狩った戦利品を換金するため、神殿に設置された窓口で並んでいた。俺たちのほかには、二、三人しか並んでいなかったのは、ほとんどの参加者がモンスターとの戦闘を回避して、神殿を目指したためだろう。

「ここは、協会が管理する神殿だよ。神聖な場所で、盗みなんて罰

当たり前なことをする奴はいないよ」

「エラハイは、見掛けに寄らず信心深いんだな」

俺の言葉にエラハイは、首を振ると、胸の十字架を見せてくれた。

「ウチの本業は、神父なんだぜ」

「それこそ見掛けに寄らないよ」

俺の買取順番が回つてくると、机に置いた小瓶からオークの指を十一本取り出して、聖布の上に並べた。買い取り金額は、一本当たり二万五千Gが相場だから、合計二十七万五千G（市民の平均月給：二十五万G）で、街の連中の平均月給を一回の戦闘で稼いだことになる。

「アルフレッド、ずいぶんと沢山のオークを退治してきたね」

エラハイは、俺の何倍もゴブリンの指を持っている癖に、見え透いたお世辞を言った。

神父は、聖布を仕舞い込むと、代わりに二十万Gと、サウスファイア王国の初代国王が描かれたメダルを一枚くれた。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ、二十万Gでは、計算が合いませんよ！」

俺は、怪訝な顔をする神父に文句を言ったが、取り合う様子もなく、次に並んでいたエラハイから、ゴブリンの指を受け取っていた。「冒険者の報酬には、国に納める二〇%の税金と、十万G以下の報酬を教会に寄付する風習があるから、取り分は二十万Gで正解なさ」

「そうなんですか？ 戦利品を換金するなら、沢山集めてからの方がいいですね」

「手持ちに余裕があるときは、換金しないのが正しい判断だ」

エラハイは、世間知らずの俺の師匠のような存在になっていた。

「ほかの連中は、気付いていないが、この儀式を終了するためのアイテムは、換金時に貰えるメダルなんだよ・・・つまり、モンスターから逃げ回っていた奴らは、メダルを手に出れない落伍者だ」

「えっ？」

俺は、神父から受け取ったメダルを見た。

「そのメダルを装備の刻印に、押し当ててみなよ」

エラハイは、自分のメダルを『弓』^{ユング}の刻印がある、うなじに押し当てると、体に吸い込まれる様に消えて行った。俺も、彼の真似をして、メダルを『鎧』^{フェルミ}の刻印に吸い込ませた。

「このメダルは、契約時の痛みを緩和してくれる。複数の装備と契約するには、契約者の痛みを緩和しないと、耐えられないからな」

エラハイは、確か三度目の儀式だと言っていたので、あと一つ契約の装備を持っているはずだ。

「このメダルは、装備に使えないんですか？」

俺は、痛みを緩和するメダルで、フェルミの痛みを緩和できないかと思った。

「彼女たちには、メダルの効果が効かないよ」

「そうですか・・・」

「後ろめたい気持ちになるなら、彼女を悦ばせる戦闘テクニクを磨くんだな。ウチらがテクニシャンになれば、痛みを忘れるほど気持ちいいらしいぞ」

「そ、そうなんですか？」

「ああ・・・エイミーは、失神するほど喘ぐけど・・・男のウチには、ちょっと想像が出来んわな」

俺は、戦闘中に喘ぎまくるフェルミを想像して、なんか色々やバイことになった。

「師匠！　しばらく旅のお供に加えてください！」

俺は、エラハイから色んなテクニクを盗んでやる。彼女を悦ばすためのテクニクなら、いくら盗んでも泥棒じゃないはずだ。

何も知らないフェルミは、ユングと神殿の階段の上から、東に登る朝日を眺めていた。

日に照らされた彼女の長い金髪は、向かい風に流されて輝いてい

る。

凜とした横顔には、感動すら覚える。

無事に儀式『初夜』をコンプリートした俺たちは、日の光を浴びながら街へと帰路に着いていた。この森のモンスターは、夜行性のため日中に襲われる心配は、ほとんどなかった。

「アル、ちゃんと、私の意見も聞いてください！ あの男との旅、私は許可しません！」

フェルミは、俺が勝手にエラハイと旅をすると、決めたことに腹を立てていた。

「勝手に決めたことは、謝るけれど、ベテランの冒険者と旅が出来るのは、俺たちにとって有難いことだろう？」

「それは、そうですね・・・初めての旅は、二人きりの方が良いじゃないのよ（モゴモゴ）」

フェルミは、口の中でモゴモゴと文句を言っているが、聞えないフリをして誤魔化した。

「エラハイは、あんな形なりをしているが、本業は、神父様らしいよ。フェルミは、ヘンタイ扱いしてたけど、ユングだって、あんな形で俺たちより二つも年上だったじゃないか。剣士の俺と契約したのだから、見る目が無いんだよ」

俺は、フェルミの間違いを指摘しつつ、エラハイとの旅に同意させた。

「だけど、あの男に気を許してはいけません。彼は、『鎧（私）』を盗むために、油断させているかもしれません」

ユングやエイミーとは、ずいぶん打解けたように見えたものの、相変わらずエラハイに対する警戒心を解こうとしなかった。

「頑固なのは、騎士の血統のせいなのか？」

俺は、『鎧』の胸をコツコツと叩きながら言った。

しかし、往路に比べて復路では、『鎧』の重量が幾分か軽くなったようだ。

「防具は、契約者好みに成長する」

俺は、エラハイの言葉を思い出して、思わずニヤけてしまった。

一緒に困難に立ち向いオークの群れを蹴散らしたフェルミは、旅に出る前の『お堅いイメージ』が、少しでも和らいだ気がする。

「どうして『鎧』には、重鎧や軽鎧の区別がないか知っているか？」

「そんなことは、冒険学の授業を聞いていれば、誰にでも解ることです」

「知っていたなら、なぜ俺に教えなかった。防具は、武器と違って適職の概念がないのだろう？」

「常識だからです・・・ふくよかな『鎧（女の子）』があれば、スレンダーな『鎧』もあります。もちろん、私のようにお堅い『鎧』も、軽い『鎧』もあります」

「そうなんだ・・・ならば、フェルミは、俺好みの『鎧』になつてよ」

「えっ？」

「だからさ、剣士の俺に釣り合いが取れる『鎧』になつてよ」

俺は、『鎧』の腰の部分を撫でながら言った。先ほどから『鎧』を色々と触っているのは、彼女の性感帯を発見するためだ。師匠のエラハイから「暇があったら撫で回せ、吐息が漏れた場所を重点的に責めろ」と、有難い教えを頂いたからだ。

「わ、私が、アルに釣り合いが取れる女になれですって！ アルが騎士になりなさい！ アルが私に合わせるべきです！」

「無茶言つなよ・・・契約者の刻印は、一人一個、生涯に一つなんだよ」

「無理を通せば道理が引つ込む、ですわ」

フェルミは、たまに難しい言葉を使って、俺を馬鹿にした。全く

意味が解らん、どこの国の格言なんだろう？

「俺だって、フェルミに似合う剣士おこしになる努力は、惜しまないつもりだよ」

ゴブリンの矢が刺さった右脇腹を、手でそつと確認したが、傷一つ残っていなかった。

「あつ、そこ触らないでください」

「まだ痛むのかい？」

「ええ、そ、そうです」

あれ？　なんかフェルミが動揺しているぞ。

「そうか・・・擦ってやろうか？」

「け、けっこうですつ、痛いから触らないでと、お願いしています」
俺は、反対側の左脇腹を強く擦って見たが、フェルミの反応が今一つだった。

「左脇腹は、人間で言うところのどの部位なんだ？」

「肩甲骨から首かな？　『鎧』の形状を上手く置換出来ないから、よく解らないわ」

左側に上半身ということは、フェルミが『鎧』になると、胴体部に巻き付いている感じになる・・・らしい。

「左に上半身だと、右が下半身だよな」

俺は、頭の中に胴体に巻き付いているフェルミを想像すると、襟首を触った。

「ここが左肩？」

「うん、左肩を触られてる」

なるほど、だいたい予想が付いたぞ・・・右脇腹は、ムフフの場所だ。

「むふふっ」

「ちよつと、やらしい笑い方は、よしなさい」

俺は、凄いに気が付いたが、しばらく右脇腹を擦るのは、止めておこうと思った。

俺は、拳を力強く天に突き出した。

「今なら魔王すら一撃で倒せるぜ！」

「そのとおりです！」

フェルミは、意味も解らずに、俺を鼓舞してくれた。
もうすぐ俺の玩具にされるのに。

私は許可しません（後書き）

ある意味、勇者の剣を手に入れた。

私が登場してません

街に戻った俺たちは、それぞれの両親に儀式成功の報告を兼ねて、エラハイとの旅支度のために分かれて行動していた。

神前契約式からは、いつもフェルミと行動していたので、一人で街中を歩く俺は解放感に浸っていた。

「おい、アルじゃないか？　儀式が成功したんだってな」

長い前髪を後ろに結った男は、学校のクラスメイトだったカイン・He・フォンダ。彼のミドルネーム「He」は、ご存知のとおり英雄の刻印を表している。

彼は、この街でも数人しかいない英雄の刻印を持っており、学校での成績も優秀だった。英雄は、血統により誕生するのではなく、凡庸なる「Tr」の家系から突然変異的に誕生する。カインのような成績優秀にして、容姿端麗のイケメンが英雄となる……らしい。

「どうも……」

俺は、軽く会釈すると、足早に立ち去ろうとした。

「アル、ちょっと待てよ。俺も来月16歳の誕生日を迎えたら、装備と契約して冒険者になるんだよ。経験者のお前には、色々話を聞きたいんだ」

カインは、俺の肩を掴んで呼び止めると、ガラナジュースを奢るから、フェルミとの話を聞かせると言われた。カインは、正義感も強く性格も悪くないし、仲の悪い友人でもなかったが、優等生タイプなので、話し相手になるのがメンドクサイ。

「えーと、旅支度の最中だから……少しだけだよ」

俺には、ニコニコと爽やかな笑顔を見せる、友人の誘いを断る勇気がなかった。カインに手を引かれるままに、中心街にあるカフェ『冒険の木』のウッドデッキに座らされた。『冒険の木』は、どん

な小さな村でも必ず一軒ある、全国展開しているカフェだ。

「冒険者の情報交換は、『冒険の木』がいいだろう？」

成人前のカインは、まだ未契約だから冒険者の真似事をして『冒険の木』で、情報交換を試みたかったのだろう。

「冒険学の落ちこぼれの俺が、成績優秀なカインに教えることなんてないよ」

「経験者のアルには、確認したいことがあるんだ・・・そ、そのフェルミとの契約だけど、痛くなかったのかい？」

「すごく痛かったよ、シヨンベンちびるくらい」

俺は、先に注射を済ませたら、後ろに並んだ奴に「死ぬほど痛いぞ」と報告するタイプだ。

「そうか、そんなに痛いのか・・・彼女は？」

「フェルミは、痛みには耐えられず、シヨンベン漏らしてたよ」

「あ、あの『オシリスの完全拒絶』と呼ばれる彼女が、失禁するほど痛いのかい。それは、相当な痛みと考えていいね・・・モーリは、耐えられるだろうか？」

カインは、口元に手を当てて青ざめた表情をしている。

優等生をからかうのは、すごく愉快だった。

「モーリ？ あのモーリ？」

カインが口走ったのは、超が十個以上付く馬鹿女のモーリ・Ar・バレキオスのことだろう。モーリは、奇抜なメイクと、腰にジャラジャラと付けたアクセサリー、口癖が『。。。だしい』『かったり』『超ウケるんですけど』『やってらんねー』など、明らかにカインに不釣り合いな女だ。

「僕の初契約相手は、モーリなんだよ・・・彼女に、告白されてしまったね」

「英雄の刻印は、全ての近接武器の適正と、あらゆる防具を使いこ

なせるのに、あんな軽い『鎧』^{おんな}が初契約の相手で良いの？」

ちなみに剣士の俺は、武器なら『剣』としか契約できない。英雄のカインなら、フェルミ級の装備^{おんな}と契約するべきだ。むしろ、モーリ（頭の）軽さは、俺の方がお似合いな気がする。

「モーリは、皆が考えるほど悪い装備^{おんな}じゃないと思う。すごく個人的だし、英雄の『鎧』に相応しいと思う」

「いいや思わない。あれは、契約の痛みに耐え切れず、すぐに逃げ出すタイプだ。」

「そうか、さぞかし個性的な『鎧』になるだろうね」

「アルも、そう思うかい？」

「個性的という点では、同意するよ」

「僕らの契約式には、ぜひ出席してくれたまえ」

カインは、俺の手を掴むと上下に大きく振った。

「あれ？ カイン様と・・・アルかよ（チツ）」

ド派手なピンクのショールを身に纏ったモーリは、俺を見て舌打ちをした。噂をすれば影。俺は、彼女から意味もなく嫌われている。「やあ、ちょうど良かった。君たちも後学のために、彼から話を聞かないか？」

「君たち？」

ド派手なモーリに目を奪われて、彼女の後ろにいた二人に気が付かなかった。『盾』の刻印を持つマーシャ・Shi・ガンティは、モーリの子分みたいな女。もう一人の女は・・・俺の従姉妹^{いとこ}のシャーロットだ・・・詳細は、のちほど。

「私も、カインさんの『盾』になりたいなあ」

マーシャは、カインの腕に抱き着いているモーリに、甘える声で言った。

「駄目よ、アンタみたいな軽薄女に、カイン様の『盾』が務まるわ

けないでしょう」

モーリは、自分のマーシャの願いを一喝した。

俺は「お前も十分軽いよ」と言いたかったが、ラブラブな二人に水を差すのは止めておく。恋は盲目。

「しかし、なんで『鎧』の女の子は、親分肌（リーダー格）が多いんだ？」

「防具の中核を担う『鎧』は、しっかり者も多いし、契約者の寵愛を受けやすいからね」

「装備の部位は、性格にも影響するのか？」

「もちろんだよ。例えば、モーリやフェルミのような『鎧』は、しっかり者で、芯の強い性格だ」

「『籠手』は？」

俺は、エイミーのことを考えた。

「籠手は、契約者の手に近い装備だから、世話焼きで、とても気の利く性格らしいよ」

エイミーは、エラハイの身の回り（色々）の世話をしてそうだ。

「だから攻撃を受けまくる『盾』マーシャは、マゾツ気が強いのか」
モーリに拒絶されたマーシャは、なぜかヘラヘラ笑っていた。彼女は、契約者に足蹴にされても、ヘラヘラ笑っていそうで怖かった。
「戦闘では、マーシャみたいな性格の『盾』なら、攻撃を受けても心が痛まないかもね」

「あら？ 試しにマーシャの顔面に蹴りを入れて、それでも笑っていたなら、カイン様の『盾』にしてあげようかしら（笑）」

黒い！ モーリの『鎧』は、きっと呪われた暗黒鎧に違いない！

そんな『鎧』との契約は、破棄した方が良いぞ。

「ボクは、失礼させてもらうよ・・・」

そう言って席を立ちあがったのは、俺の従姉妹シャーロット・ライダー。彼女の母親と、俺の母親が姉妹で、近所に住んでいる兄妹

みたいな関係だ。

「さてさて、契約の話は、もう止めるからジュースくらい飲んでいけよ」

俺は、シャーロットの手を掴むと、強引に席に戻した。

彼女には、ミドルネームがない。

刻印を失った彼女の前で、契約の話で盛り上がったのは、俺たちが無神経だったと詫びるしかなかった。

シャーロットの母親は、俺の母親と同じ『剣』の刻印を持っており、父親が『魔法使い』という珍しい夫婦だ。魔法使いの武器は、『杖』なので、多くの魔法使いが結婚相手に『杖』を選ぶ。

そもそも魔法使いの刻印は、血統でしか誕生しないため絶対数が少なく、希少な魔法使いの血統を継いだ装備むすめというだけで珍重されている。

魔法使いの息子は、『魔法使い』か凡庸な『T r』の刻印だが、娘たちは、魔法効果が付加された装備になる。エイミーの『籠手』が青白く輝いて、吸血効果を持っているのは、彼女の父親が魔法使いだからだ。

シャーロットは、母親の胎内にいるときから、多くの契約者に契約を申し込まれるほど、注目を集めた逸材だった。彼女は、刻印さえあれば最高の装備おんなになれた。

俺が中等部を卒業する朝、シャーロットに「刻印が浮かび上がった」と嬉しい知らせがあり、同級生だった俺は、登校前に彼女に花束を届けた。女の子に刻印が現れたと聞いた同級生は、お祝いに花束を贈って、契約を申し込む真似事をするのが、この地方の風習だった。

「ボクに、契約を申し込んでくれたのは、お前だけだ」

俺が花束を届けた日の夕方、落胆する叔母さんから「刻印が消え

た」との報告があった。

シャーロットの刻印が消えた理由には、色々な噂があったが、結局は「乙女で無くなった」から、刻印が消えたのだ。彼女は、刻印が刻まれた日に、何者かに純潔を奪われた。

それが愛のある行為だったのか、暴漢に乱暴されたのか・・・真実は、闇の中へ消えて行った。

俺たちは、『冒険の木』を出ると、街の外壁の外にあるリット村に、マーシャを送り届けるため皆で移動していた。

街の外には、森と反対側に小さな集落が点在しており、マーシャの住んでいるリット村は、外壁の拡張工事のため作られた村だった。

「こんな明るいのに、護衛が必要なのか？」

「アルは、本当に何も知らないんだね。女の子たちが、どうして徒党を組んでいるのか、その理由^{わけ}を考えたことがあるかい？」

カインは、前を歩いている三人を指差した。

「女って生き物は、集団行動が好きなんだろう」

「・・・違うよ。彼女たちペンタグラムを有した女の子は、盗賊に狙われる可能性があるから、けして一人で行動しないように、幼い頃から躾けられているんだ」

「成人（16歳）前の女の子でも、物理的に契約するのは可能だ。盗賊にモラルを求めるのは、期待できないもんな」

成人前の乙女と契約すれば、教会により非常に厳しい罰が下される。俺は、無意識に成人前のモーリとマーシャを装備として考えていなかった。それほど教会の教えは、俺たちのモラルを徹底していた。

「モーリは、僕より早く、あと二週間で成人する」

「悪い虫が付かないように、監視も兼ねた護衛つてやつだな」

「冒険者となったアルには、無料で護衛を頼んで申し訳ないけど、宜しく頼むよ」

護衛も冒険者の稼ぎらしいが、友人の頼みに金を要求するほど、

俺は守銭奴ではない。

「従姉妹のシャーロットを護衛していると、考えればいいさ」

「シャーロットには、護衛が必要ないだろう？」

俺は、カインが刻印を失ったシャーロットを侮辱したと思ったが、
「彼女は、剣技のトップランカーだよ」と続けたので、その意味を
正しく理解した。

「そうだな、シャーロットなら良い装備になっただろう」

「アルは、彼女が刻印を失った理由を知っているのかい？」

俺は、首を横に振ると、年頃の女の子が刻印を失うだけで、世間の
好奇の目に晒されると思うと、やるせない気持ちになった。刻印
を失っても、シャーロットの美しさは、色褪せるものじゃなかった。
春風のようなシャーロットの後ろ姿には、フェルミと違った意味
で、優雅さを感じさせる。フェルミの高貴な立ち姿が、悠久の騎士
の血統によるものだとなれば、シャーロットの後ろ姿は、両親や周
囲の愛情に支えられた、暖かな雰囲気を感じさせる。

「アル・・・少し様子がおかしくないか？」

カインは、俺の行く手を遮るように、前に立ち塞がった。

「そう言えば、鳥の鳴き声が聞こえない」

俺は、腰に装備していた、轟くCWWを眼前に構えた。

「お兄さんたち、その装備を置いて立ち去りな！」

俺は、本物の盗賊と生まれて初めて対峙した緊張感で、下腹に鈍
い痛みを感じた。

盗賊たちは、男が四人、女が五人だが、たぶん軽装の女たちは、
盗賊の装備に違いなかった。

「どうする・・・あの盗賊は、契約者だぞ」

俺は、前衛に立っているカインに言った。

「戦うしかないだろう・・・それともアルは、彼女たちを見捨てる

つもりか？」

「いいや、俺もそこまで腰抜けじゃない。俺の轟くCWWでは、契約の装備に敵わない。モーリたちを逃がしたら、俺たちも逃げるぞ」

「英雄の僕が、敗走するのは忍びないが・・・」

カインは、小さく頷くと、彼女たちの前に飛び出した。

「お前たちは、まだ契約の装備を持っていない子供だろう？ 俺たち契約者と戦って、勝てると思っているのか」

盗賊の三人は、女の右掌にキスをする、『剣』を装備した。そして『剣』を装備した三人の後ろにいた、口髭を生やした盗賊は、両手に女を抱えて一人の右二の腕、もう一人の左鎖骨にキスをした。

「『斧』の刻印は、右二の腕に、『盾』の刻印は、左鎖骨にあるんだな」

俺は、妙なことに関心を示すと、モーリたちを後ろに隠すように前に出た。

「四対二では、分が悪いだろう・・・ボクも加勢するよ」

シャーロットは、護身用に持たされていた、秘剣スイートソードを鞘から抜いた。

「シャーロットくんは、刻印の力を持^{スキル}っていないから、契約の武器と戦えるはずがない」

「ここは、俺とカインに任せて、モーリたちを街まで逃がしてくれ・・・もしも、余裕があるのなら、警備兵を呼んできてくれ！」

盗賊たちは、警備兵に助けを求めた俺を鼻で笑った。

「ボクは、剣技のトップランカーだぞ・・・スキルがなくても戦えるさ」

学校の剣技では、契約者のスキル発動を禁じられており、俺たちよりシャーロットの成績が上でも、実践で勝ると限らない。

「轟くCWW！ 風のように！」

ブオオオオ！ 俺は、先手必勝と考えて『剣技ハヤブサ』で盗賊

を攻撃した。ちなみに叫んだのは、威嚇を兼ねた景気づけだ。
盗賊は、俺のハヤブサを剣でいなすと、俺の背中を剣の嶺^{みね}で叩きつけた。

「ガハっ！」

俺は、勢いよく前のめりになると、顔から地面に倒れ込んだ。やはり作られた『剣』では、契約の『剣』に敵うはずがなかった。

「アル、大丈夫か？」

カインは、俺の失態に腰が引けたようだ。

「だ、大丈夫・・・なわけない」

「喋れるなら、大丈夫だな」

「カイン様、お守りします」

モーリとマーシャは、逃げるどころかカインを守るように左右に並んでいた。

「俺が特攻している間に、逃げれば良かったのに・・・ガク」

盗賊どもの狙いは、未契約のモーリとマーシャなのだから、二人さえ逃げてくれれば、盗賊だって諦めてくれるのに・・・本当にモーリは、超が百個付く馬鹿女だ。

「カイン様、私たちと契約^{がったい}しましょう！」

モーリは、フェルミと同じように襟元を引き下げると、胸元のペンタグラムを露^{あら}わにした。馬鹿女のくせにオッパイの大きさは、フェルミに負けず劣らない。

さらに驚いたのは、マーシャが上着を全て肌蹴^こて、ほぼ裸の状態で恍惚の表情でいることだ。『盾』の彼女がマゾっ娘^ことの噂は、真実だった。

「しかし・・・成人前の女の子との契約は、教会で禁止されている」
カインは、同級生の女の子二人の裸を前にして、顔を真っ赤にした。

「何を躊躇^{ちゅうそ}してるんだ！ このフニヤチン野郎！ 俺が二人と契約

するから、お前ら、ちょっとこい！」

「カイン様、こんな状況です。神罰は、下るはずがありません」

モーリは、半ば強引にカインの顔に胸を押し付けて、彼の初キスを奪った。

「私にもしてください（ヘラヘラ）」

マーシャは、まだモーリとの契約の痛みに耐えているカインに、飛びついて彼の口に鎖骨打ち当てた。

ガチンっと、カインの前歯に、マーシャの鎖骨が当る鈍い音がすると、彼は、前屈みに口を押えた。

なんだか気の毒な初契約である。

「い、痛い！ マジで痛すぎるから！」

ほぼ三人が同時に痛みを訴えると、カインの体が赤い炎に包まれて、ついに契約の『鎧』と『盾』を装備した、本物の英雄が誕生した。しかし前歯からの激しい出血のため、ちょっと残念な登場となった。

カインは、真紅の『鎧』と、淡いピンクの『盾』を装備していた。「こ、これがモーリと、マーシャなのか・・・すごいフィット感だ」モーリとマーシャの変態を着こなせるのは、カインくらいだろう。カインは、上半身だけ見れば、立派な英雄に見える。

残念なのは、重厚な上半身に対して軽装な下半身と、前歯が血だらけなことくらいだ。

「カイン、こんな時だが、初契約おめでとう」

「アル、有難う！ これなら盗賊どもを蹴散らせるぞ！」

カインは、左手の『盾』を前に突き出して、剣を持つ右手を腰に当てた。

「あはゝん、カイン様、そこは駄目ですう」

「モーリ、ここが駄目とは、どういう意味なんだい？」

カインは、右脇腹を擦っていたが、そこは、モーリのムフフな場

所だ。初契約なのに、人目を気にせず『鎧』の右脇腹を擦るなんて、なんて大胆な男なんだ。さすが英雄としか、コメント出来ないわ。

私が登場してません（後書き）

さすが英雄としか、コメント出来ない・・・

ボクを助けてほしい

俺は、立ち上がって体制を整えると、剣を構えるシャーロットの傍まで駆け足で戻った。

「カインも、こっちにきて円陣を組もうぜ！」

「わ、分った……」

盗賊共の親玉は、たぶん『斧』と『盾』を装備した口髭の男だろう。

俺は、契約の装備で身を固めたカインに、口髭の対峙するように指示した。

「どうします兄貴、装備が契約しちゃいましたよ」

盗賊の一人は、口髭の男を兄貴と呼んで、戦闘を続行するのか確認していた。彼らは、転売目的のため未契約の装備が欲しかったのだろう。一度でも契約してしまった装備は、既に能力値が明らかで、買値が半減してしまうのだ。

未契約の装備の価値が落ちるのは、食玩の中身が解ってしまえば、需要が半減するのと同じ理由で、何の特殊効果がないモーリやマーシャを、高い金を出して買う馬鹿はいない。

「それに契約中の装備を奪うには、契約者を殺すわけにもいかない・・・これでは、あまり美味い商売じゃないな」

「俺たちが怪我でもしたら、手間の方が大きいはず。こいつらの装備は、諦めますか？」

盗賊たちは、何やら話し合っており、このまま見逃してもらえそうなのな雰囲気だ。

口髭の男は、顎を撫でながらシャーロットを見ている。

「おい、その勇ましい娘！」

シャーロットは、脇を引き締めて秘剣スイートソードを強く握っ

た。

「ボクのことか？」

「お前の契約者は、その坊主か？」

口髭の男は、『斧』の先を俺の方に向けて言った。

「ボクは、契約の刻印を失っている・・・」

「ほお、その腰付きで男を知っているとは、思えないな（ニヤリ）」

口髭の男は、引き締まったシャーロットの腰を眺めると、ペロリと舌を出して笑った。

「計画変更だ！ あの娘を娼婦館に売り飛ばすぞ！」

盗賊共は、口髭の一言で再び剣を構え直した。

「戦うよりほか、道が無さそうだな」

カインは、まだ痛みの引かない胸を抑えながら、盗賊共の一人に切りかかった。

盗賊は、飛び退くとカインの剣が空を切った。

実践では、場数を踏んでいる盗賊に分があった。

しかし英雄のカインは、潜在能力で遥かに盗賊に勝っていた。

盗賊の『剣』を『盾』でいなすと、二の太刀で足元をすくって倒し、剣技ジャックナイフを発動して、盗賊の喉元に剣を突き立てた。剣技ジャックナイフは、剣技ハヤブサの次に覚える剣士のスキルで、切先の直線上にある敵を数メートルに渡って貫くのだ。ちなみに俺も使える。

「ぐふっ！」

喉元を貫かれた盗賊は、首を手で抑えても止らぬ血けつりょう量に、死を覚悟して装備を解除した。

倒れ行く盗賊と右手を繋いで解除された『剣』の女は、「死にたくない！」と懇願しながら、ほかの盗賊に右掌のキスを求めた。

「契約者の『死』は、装備の『死』か・・・これは、辛い現実だな」

「カイン、あまり気にするなよ」

「盗賊は、俺たち契約者の面汚しだ。このまま戦って、皆殺しにしてやるよ」

俺は、初めての人殺にカインが動揺していると思ったが、意外なほど冷静でいることに、多少の驚きを感じた。

俺が森でオークを退治したとき、フェルミが暴走気味だったが、カインの『鎧』や『盾』は、今の戦闘で快感を覚えているのではないだろうか？ やはり作られた装備では、契約の装備と比べものにならないと思った。

「あああああ！」

女の悲痛な叫び声が聞えると、死んだ盗賊の契約の装備だった女は、契約を解除した盗賊の新たな『剣』となっていた。

「おいおい、二刀流も可能なのかよ・・・奥が深いな」

仲間の一人を失った口髭の男は、二刀流の盗賊と、もう一人の盗賊に、カインと戦うことを命じて、自分は、俺とシャーロットの方に向き直った。

「死んだ子分の稼ぎは、娘の体で払ってもらおうか」

口髭の男は、斧に舌を這わせると、大きな風切音とともに、俺とシャーロットの間に振り下ろした。

「モーリ、アーシャ・・・二人とも大丈夫かい」

二刀流となった盗賊の連続攻撃を『盾』で防いでいたカインは、二人を気遣って話しかけた。

「カインさん・・・アーシャは、悪い子です。もっと前に突き出してえ、叩いて・・・もっと叩いてほしいですう」

マーシャは、完全にイカレた『盾』だ。おんな『盾』が全員マーシャみたいな性格だと思われたら、明日からサウスフィア王国の『盾』の刻印を持つ女性たちは、左鎖骨の刻印を隠して生きることになるだ

ろう。

「ああ、どうしよううカインさん・・・マーシャ、もう耐えられそうにありません・・・イキそうれすう・・・ああ、どうしましよう」

「マーシャ！ イクって壊れるってことかい？ もう少し耐えておくれ！ 僕のマーシャ、イク（死ぬ）ときは、一緒に逝こうおおお！」

カインは、『盾』を大きく上下に振ると、体技ニードルタツクルを発動して、二刀流の盗賊の懷に飛び込んだ。体技ニードルタツクルは、『盾』に意識を集中して極限まで硬度を高めると、相手の懷に侵入して体制を突き崩す体術だ。

ドスつと鈍い音がすると、カインの『盾』は、二刀流の盗賊の鳩尾^{みぞおち}に減り込んだ。

「はあくんっ！ アーシャ、イキますううう！」

マーシャは、全身の力を込めて耐え忍んでいたが、カインの力強いタツクルで、体の奥に溜め込んだ何かを、二刀流の盗賊目掛けて放出した。ロボットアニメの主人公のような、叫び声を残して。

「こ、これは・・・『盾』の特殊効果『耐忍ぶ』だ！」

マーシャは、初めての戦闘で特殊効果を物にした。

彼女の生まれ持った才能なのか？

カインがテクニシャンだったのか？

とにかく初契約、初戦闘で、見事にマーシャの体を開発したのは、さすが英雄としか言えなかった。

マーシャが発動した特殊効果『耐忍ぶ』は、英雄スキルの体技ニードルタツクルとの相性が良く、相乗効果として、体技ニードルタツクルの威力が百倍になった。

単なるタツクルだと思って避けなかった二刀流の盗賊は、『盾』の特殊効果で鳩尾から真つ二つになった。窮鼠猫を噛む。

実戦経験のないカインを見縊^{みくび}った盗賊は、上半身をカインに預けて、下半身が両膝を付くように崩れ落ちた。

滴り落ちる生温い血は、真紅の『鎧』をテラテラと輝かせた。

「カイン様、血でヌルヌルしてきもち・・・いわ・・・」

「モーリ、気持ち悪いのかい？」

「カイン様、そこがヌルヌルして気持ち良いわ・・・もっとヌルヌルしたいですう」

また、このパターンかよと、俺ならツツコむところだが、『鎧』が血を好むのは、どうやら基本的なこと・・・らしい。

「ああ、そ、そうなのか・・・モーリ、あと一人盗賊がいるから、タツプリと注ぎ込んであげよう」

カインは、初めての戦闘、初めての契約にも関わらず、さすが学校での成績優秀者だ。俺なんかよりも、十分に契約の装備を使いこなしている。優等生のくせに、女たらしの才能まで秀でているとは、なんとも羨ましい男だ。

「最初の盗賊、二刀流の盗賊、これで僕は、四人の人間を殺したことになる・・・もう、何も感じないよ」

カインは、上目使いに最後の盗賊を睨み付けると、呪いの言葉のように言った。

「お、お前の契約の装備は、武器じゃなくって、単なる防具じゃないか・・・俺の『剣』には、特殊効果『毒』が付加されているんだぞ」

「それが、どうしたんだ？」

「ほんの少しでも、傷が付けば、そこから腐って行くんだ・・・恐ろしいだろう」

「盗賊に相応しい、未婚の毒女というわけだ・・・あははは」

カインは、両手を下にして、いつでも打ち込んで来いと言った。

盗賊が迫力負けして睨み合いになったのは、言うまでもなかった。

口髭の男は、シャーロットを軽んじているのか、俺だけに『斧』向けていた。

「俺が口髭を引き付けるからシャーロットは、秘剣スイートソードの『魅惑』で攻撃しろ」

彼女の携えている秘剣は、ウチの鍛冶屋が彼女のために作った護身用の剣で、『魅惑』の特殊効果が付加されている。

俺の特殊効果のない轟くCWよりも、少しだけ上等な剣だ。

「『魅惑』で視界を奪えるのは、ほんの数秒だし、ガサツな男には、幻術系の魔法耐性がある・・・私が困になって、アルの剣技スキルで攻撃した方が良いだろう？」

「お前は、そうやって意地を張るところが、悪い所だ」

「あの男は、ボクを娼婦にするつもりだ。ならば、商品を傷付けるはずがない」

「怖くないのか？」

と、俺が言うとシャーロットは、コクリと頷いた。彼女の言うとおり、娼婦館に売り飛ばすならば、傷付けないように配慮するかもしれない。口髭が体勢を崩してくれば、俺の剣技スキルで倒せる可能性は大きい。

「ボクの『魅惑』で視界を奪っても、逃げ回るだけなら、体力を消費するだけで意味がないぞ」

「分かったよ・・・シャーロットの作戦で行こう」

口髭の男は、『斧』を背中まで下げると、同時に『盾』を前に構えた。

『斧』を使ったスキルを発動する気だろう。

一刻の猶予もないと悟ったシャーロットは、狙いもそこそこに飛び出した。

「やはり、お前は、素晴らしい娘だあ」

口髭の男は、スキル発動のポーズを囃に、シャーロットが飛び込んでいるのを待っていたのだ。男は、彼女の一撃を『盾』で防ぐと、秘剣スィートソードの柄つかごと右手を捻りあげた。

「スキル発動は、見せ掛けだったのか」

「経験不足は、勇み足を招くぞ（笑）」

口髭の男は、シャーロットを釣り上げた魚のように、高く持ち上げた。

「い、痛ひいいいい！」

自分の体重を右手だけで支えていたシャーロットは、腕が抜けるような痛みに、思わず悲鳴をあげた。普段の気丈の彼女からは、想像が出来ないほど情けない悲鳴だ。

「シャーロットを離せ！ ゲス野郎！」

俺は、轟くCWの切先を口髭の男に向けると、剣技ジャックナイフの狙いを定めた。

「小僧、そんな震える切先が、俺様に当ると思っているのか？」

「どうだろうな・・・試してみるか」

俺の剣技ジャックナイフの命中率は、十発中二発当たれば大成功だった。下手な鉄砲数撃ちや当たる。

だが、確実に一発で仕留めなければ、俺に『斧』を防ぐの實力はない。とりあえずハツタリかまして、彼女を取り戻すチャンスを待つ。

「お前は、この娘の恋人かあ？」

「・・・いいや、違うぞ。だが、俺の大切な人だ」

「ボクが、アルの大切な人？」

シャーロットは、右手が抜けないように、右の脇を左手で抑えていた。

「この娘は、お前の契約の装備でもない、恋人でもない」

「そのとおりだ・・・だが、俺は、彼女に契約を申し込んでいるよ」

「お前は、この娘にフラれたのか？」

俺は、中等部を卒業した日、たった一日だけ彼女に刻印が現れた日、花束を持って契約を申し込んでいた。

あのときの気持ちは、忘れていない。

あの告白は、真似事^{うそ}じゃなかった。

「俺は、シャーロットにフラれたのだろう。俺が告白した日、彼女は純潔を失っている」

「アル・・・違うんだ」

口髭の男は、情けない俺の話しに、涙を流して大笑いした。

「面白い小僧だ！ 娘に告白した日に、ほかの男に寝取られたとは、お前も哀れな男だ。本当は、お前を裏切った、この娘が憎いんだらう？」

口髭の男は、もう抵抗すらなくなつてシャーロットを俺の方に向けた。男は、彼女の左手も掴むと、左右に大きく引つ張った。彼女は、十字架に張り付けられた格好で、俺のことを見ながら涙を流していた。

「ごめん・・・ボクは、アルの気持ちに気付いてやれなかった」

「小僧！ お前の飛び出すナイフ（剣技ジャックナイフ）を放つてみる」

シャーロットの右脇から顔を覗かせた口髭の男は、俺の命中率で貫くのが不可能だ。

「アル、ボクのことは、構わないでくれ・・・ボクをゲス野郎ごと貫けば良い・・・」

「アホか！ シャーロットは、強い娘^こだろう」

俺は、轟くCWWを口髭の足元に投げ付けると、両手を挙げて降参した。

「戦わずして敗走とは、契約者の名折れだな」

「俺は、情けない剣士だよ」

口髭の男は、彼女を娼婦館に転売するなら、彼女が殺されるより数倍マシな決断だ。俺は、彼女を失いたくない、その一心で悪党の

情けに縋ろうとしている。

「・・・うん？」

シャーロットの右脇から覗いていた口髭の男は、そこに何かを見つけた。

「俺は、もう降参したんだから、彼女を連れて行けばいいだろう・・」

俺は、カインと離れて戦ったことを後悔していた。もしかしたら、彼の加勢が得られるのではないかと、山裾に消えた英雄の到着に期待していた。

「お前ら、よくも俺を騙したな。この娘には、ペンタグラムが有るじゃないかあ」

と、口髭の男が言うと、シャーロットの軽装備を右脇の下まで引きちぎった。

「なんでシャーロットに未契約の刻印が・・・」

シャーロットの右脇の下には、無印のペンタグラムが浮かび上がっていた。

「右脇の下に刻印なんて、俺の長い盗賊稼業でも初めて見るぞ。この契約の装備は、さぞかし高い値で売れるだろうよ（笑）」

口髭の男がニヤニヤと、シャーロットのペンタグラムに顔を寄せて笑っていると、彼女はカッと目を見開いて、男の顔を蹴り上げた。ためき寝入り。

男の簸るんだ隙を付いたシャーロットは、俺の足元まで転がると、俺を庇うように両手を広げた。

「シャーロット・・・その刻印は？」

「ボクは、希少性の高い魔法使いの娘だよ。装備の契約が可能になれば、良からぬ輩に襲われる、危険があるからね」

シャーロットの刻印が浮かび上がった日、大勢の契約者が契約を申し込んできた。彼女の両親が対応に苦慮した結果、乙女を失った

ことにした。それに彼女のペンタグラムは、人目に付かない右脇の下で、隠し通すのが容易かった。

結果的に彼女は、成人前に乙女を失った女だと、不名誉な噂に悩まされることになった。

「そうだったのか・・・ごめんよ」

俺は、シャーロットの清らかな心を疑っていた。

本当に大馬鹿野郎だ。

「ぐぐつ、小娘が、俺を足蹴にしやがったなあ・・・」

口髭の男は、顔面の痛みに堪えながら、今度は本当に『斧』のスキルを繰り出すつもりだ。

「アル、ボクを助けてほしい」

助けたいのは山々だが、俺の轟くCWWは、口髭の男の足元に投げ捨ててしまった。

「シャーロットの秘剣を貸してくれ、今なら剣技ジャックナイフも当たる気がする」

あくまで気がするだけで、当たる保証はないのだが。

シャーロットは、右手を俺の肩に回すと、鼻先にペンタグラムを近付けた。

「少し汗臭いのは、我慢してくれよ・・・あの日、ボクに直接契約を申し込んだのは、アルだけだ」

彼女の右脇の下は、汗の匂いなんてしなかった。

「いいのか・・・シャーロットなら、俺より強い契約者と、契約出来るだろう」

「あの契約申し込みが、まだ有効ならば、今ここで契約を躲そう」
シャーロットは、既に成人しており、ここで契約を交わすことに道義的な問題はない！

「シャーロット、いつまでも大事にするよ」

俺は、肩に手を回した彼女を斜向かいに抱えると、彼女の全てを吸い込むように、右脇の下を強く唇で吸った。

「ああああ、アル、ボクは、最高に幸せだよ！」

シャーロットは、恥かしい台詞とともに、契約の装備に姿を変えた。

右脇の下の痛みは、想像以上の痛みで、右の手の感覚を奪っていた。

「い、痛い、こ、これでは、せつかくの装備が扱えないだろう・・・くうっ！」

森での儀式で貰えるメダルは、契約者の痛みを緩和する、アレが必要な理由が理解できた。

刻印の輝きが落ち着くと、俺の右手には、四方八方に剣先が広がった『剣(?)』が握られていた。

薄紅色に輝く『剣』は、まるで薔薇の花束のようだった。

「アル、ボクに通り名を付けてほしい・・・ボクに相応しい名前を」

「『踊り狂う魔法剣ブラッディローズ』爆誕！」

薔薇のような姿形と、彼女の血統により魔法系の特殊効果に期待して、彼女の通り名を命名した。

彼女は、徐々に中央に集束すると、刃先の細い両刃の『剣』になった。

「アル、ボクは・・・美しいか」

シャーロットのように洗練された美しい『剣』は、俺の力量を引き上げてくれるに違いなかった。

ボクを助けてほしい（後書き）

次回、興奮のバトルに括目せよ！ てへっ ^^

ボクが決めたことだ

口髭の男は、俺たちの契約の見届け人となったことを地団駄を踏んで悔しがった。

「魔法使いの娘だったとは、くそガキ共めえ！」

薄紅色に輝く『剣』を見た男は、シャーロットが魔法系の特殊効果を付加した契約の装備だと、気が付いていたようだ。

「下賤のお前にも、シャーロットの魅力が理解できるようだな」

俺は、鋭く尖った『剣』を真一文字に構えると、剣技ハヤブサを中空に繰り出して、ブオオオオ！と風音で威嚇した。剣技スキルを無駄撃ちしたのは、彼女を娼婦にする企みも、契約の装備として奪うことも叶わなくなった男に、これ以上の戦いを諦めされるためだ。

「こうなったら、お前の右手を根元から切り落として、『魔法剣』だけでも持ち帰ってやるわあ！」

俺の好意を無にするように口髭の男は、盗賊の親分らしい台詞で対抗してきた。

「普通の『剣』とは、違っていると思ったが・・・彼女は『魔法剣』なのか？」

「たださえ希少性の高い魔法使いの娘、中でも武器が生まれる確率は、百人に一人と言われている。その武器でさえ、魔法使いの『杖』ばかりで、『剣』が誕生したなど噂にも聞いたこともない・・・小僧は、殺さず半殺し、娘を俺様の契約の武器にしてくれる」

男は、ご丁寧にシャーロットの凄さ全て教えてくれた。

「シャーロットは、とても貴重な『魔法剣』らしいぞ」

「駄目だよ・・・ボクは、初めてなんだから、話しかけられたら集中できない・・・」

シャーロットが湧き上がる興奮に身を震わせると、『魔法剣』の

切先がフルフルと、二本、三本、四方に広がってしまった。まるで手品師のステッキの先に、赤い花が咲いたみたいだ。

「わ、わ、分った、頼むから、じっとしてくれよ。肩の力を抜いて、切先を閉じておくれ」

「う、うん、分かった・・・ボク、頑張るよ・・・うん！ うん！」

シャーロットは、力いっぱい足を踏ん張るように、低い唸り声をあげた。

「違う、違うよ、シャーロット、力を抜いて、リラックスするんだ」

「ボク、初めてだから、カンじゃうの・・・」

泣くなシャーロット、やれば出来る娘なんだよ。

誰にだって初めての経験は、必ずあるんだからね。

「その『魔法剣』は、おぼこ娘のようだな（ニヤリ）」

「ボ、ボクが、世間知らずだって言いたいのか・・・近所のおばちゃんからは、ヤリマンのシャーロットと噂されてきたんだぞ！」

おい、お前のヤリマン伝説は、ためーの両親が広めた噂話じゃないのか？ どうも装備中の彼女たちは、若干思考能力が落ちるようだ。

「さてさて、今は、俺の剣技スキルを発動するため、リラックスしてくれよ。このままだと、俺の『気』を挿入できないぞ」

俺の手に握られた『魔法剣』は、ある意味で疾風シルフィーネ零式よりも、じゃじゃ馬だと思った。

「アル・・・もう落ち着いたから、早く挿入してくれ・・・もちろん『気』の方だぞ」

「あ、当たり前だろ！」

シャーロットは、何を期待していたのだろう？

いや、俺が期待していたのかもしれないが。

シャーロットは、落ち着いたと言っていたが、剣先は相変わらずフルフルと幾重^{いくえ}にも分かれていた。

「小僧たち、そろそろ右手にサヨナラを告げな！」

口髭の男は、高く構えた『斧』を、俺の右肩目掛けて振り落とそうとしていた。

「い、いかん・・・先手必勝！ 飛び出せ！ 剣技ジャックナイフ！」

もちろん掛け声は、景気付けたが、ハンマー投げの選手が投擲後に、無意味に「あああああつあつ！」と叫ぶのと同じで、発動時に叫ぶと命中率が上がる気がする。

シャーロットは、不意を突かれて『気』を挿入されて「ううっ！」と、小さな呻き声で苦痛に似た何かを訴えた。

「な、何だと、これが剣技ジャックナイフだとお！」

振るえる『魔法剣』の切先から繰り出された剣技は、無数の光の矢となって男の体を蜂の巣にした。

「これなら命中率とか、ぜんぜん関係ないじゃん（笑）」

ただ一本、一本の威力が分散されていたため、男に致命傷を与えるに至らなかった。

「見たか！『魔法剣』の隠し技、剣技インクリースナイフ（Increase Knife）の力を！」

全身から血が噴出した男は、振り上げた『斧』力なく下した。

「す、すごいぞ・・・本人のボクでさえ、知らなかった技だ。ボクの知らないボクを、アルが開発してくれる」

そりゃそうだ、いま俺が命名した。

忘れないうちに、すぐに資料を更新しておこう。

「おのれ・・・」

さすがの奇襲攻撃に、男も後退りして距離をとった。

「おい、オッサンも血達磨じゃないか。ここは、痛み分けにしない

か？」

俺は、敵の敗走を願って一步引き下がった。

「アル、お願いがあるんだ」

「どうしたシャーロット？ もうすぐオッサンが「覚えておけよ！」と、捨て台詞を吐いてミッションコンプリートだぞ？」

俺は、もう一度「Mission Complete!」と、親指を突き立てて流暢な発音で言った。

「そんなの嫌だ！ ボクは、まだ誰も切っていない・・・こんな状態で、装備解除なんてしたら、ボクは、アルのこと嫌いになるぞ」
「ええゝつ」

「イヤイヤ！ 言うこと聞かないと、もう好きなとき『魔法剣』してやらないぞ！」

「そんなこと言っても・・・俺だって、仕事（旅支度）で疲れてるんだよ」

「イヤイヤ！ あのオッサンを肉塊にしよお、ボクの一生のお願いだよ・・・」

シャーロットは、いつからオネダリさんになったのか？

俺は、彼女に甘えた声を聞いたら、色んなところが元気になった。

「シャーロット、もう一回だけだぞ」

「アル、大好きよ・・・」

俺は、『魔法剣』の鍰つばに親指をあてがうと、焦らすように撫でた。
「いいかい、シャーロット・・・今度は、上手く力を抜けよ」

親指が、鍰の突起した部分に触れると、彼女の息遣いが荒くなった。

その突起した部分に、爪が当たたらぬよう慎重に指の腹で確かめながら、前後左右に刺激した。

「ああつ・・・アル、そこ、そこが熱いよ・・・」

「いいかい、シャーロット・・・イクときは、一瞬だよ。タイミングを逃さないでくれ」

俺は、また新たなる『魔法剣』の剣技を思い付いて、それを試そうと考えた。

先ほどの剣技インクリースナイフのときも感じたが、もしかすると本当に『魔法剣』の所有者のみが発動出来る剣技があるのかもしれない。彼女との契約で、その隠されたスキル（契約の力）を手にしているのではないか？

相手との距離は、攻撃の間合いに入っていた。

「あつ、あつ、あつ・・・」

シャーロットの吐息は、感覚が早まり、そして一定のリズムを刻んでいる。

あとは、俺が剣技を放つタイミングを間違えなければ、必ずイケるはずだ。

俺は、彼女の興奮を損なわぬように、そつと『魔法剣』をヘソの高さで正面に構えた。

そこは、シャーロットが膝を着かずに、四つん這いで尻を挙げている高さだ。

「そ、そんな、ボク初めてなのに、バックから突くの？ あつ、ああ・・・」

彼女は、吐息さえ噛み殺した。

「そろそろイキたいだろうが、もう少し我慢しておくれ」

俺は『魔法剣』に、お留守になっていた左手を添えると、両手で彼女の柄つかを持ち上げた。

「『魔法剣』の隠し技・・・」

口髭の男は、俺の殺気に身を震わせている。

もう覚悟を決めたのだろう、逃げる気配すら見えない。

「リターンズオータア（Returns altar）！」

「あは~~~~~んっ」

俺は『魔法剣』を正面に構えた状態で走り出すと、地表の起伏に

関係なく、男の真正面まで辿り着いた。あとは、シャーロットを深く突き刺すだけだ。

「ぐはあっ！」

蹲る男の呻き声は、確かに聞こえたものの、切先が肉を切り裂く手応えがなかった。

「アル・・・盗賊と契約している女たちは、近くの村からの盗品だった」

カインは、切り落とした盗賊の右手と、一人の女の子を連れて戻っていた。

「まさか、そんな馬鹿な・・・盗品だって？」

俺の剣技リターンズオータアは、アーシャの発動した『耐忍ぶ』で防がれていた。

俺たちは、装備解除すると、口髭の男を縛り上げて拷問に近い強迫で、盗品を装備解除させた。

「あ、有難うございます・・・」

口髭の装備たちは、俺とカインに怯えた顔で、頭を下げると震えながら座り込んだ。

モーリとマーシャは、少し離れた場所に生き残っている三人の装備を連れて行き、そこで水筒から熱いお茶を飲ませていた。

「ボクは、同じ契約の装備として、彼女たちが強姦に等しい扱いを受けたと知っている。出来ればアルとカインで、彼女たちを解放してやってくれないか？」

シャーロットは、盗品の女たちの刻印にキスをして、盗賊たちからの解放を願っていた。

俺たち契約者のキスで彼女たちを解放することは、容易かったものの、俺の気持ちは混乱していた。

カインは、力いっぱい岩に拳を叩き付けると、グローブが血で滲

んだ。

「僕は、彼女たちの友人を二人殺したんだぞ！」

一人目の盗賊に装備解除された女は、命乞いをしながら次の盗賊の二刀流になった。

その二人目の盗賊を真つ二つにして、引き裂いたのもカインだった。

「俺たちは、非がないと思うぜ」

「ち、違うんだ・・・一人目の盗賊から装備解除された女は、僕に命乞いをしていたんだ・・・僕が気付いてさえいれば、あのとき僕が解放してやった・・・」

カインは、盗賊からもぎ取った右手を掲げた。

「こいつは、出血多量で、もう長く持たないだろう」

契約者の肉体から離れた刻印に、契約の装備を繋ぎ止める力はない。

だが、契約自体が解除された訳ではないので、盗賊が死ねば女の一人が死ぬことになる。

カインは、盗賊の薄汚れた右掌にキスをした。

盗賊との契約から解放された女は、自由の身となった。

「有難うカイン、ボクからも感謝するよ」

シャーロットは、女たちのところへ報告に行った。

カインと二人で残された俺は、涙を流す友人の肩を抱いた。

「悪いのは、盗賊だろう？ お前は、モーリたちを守ったじゃないか」

「アルは、冒険者となって、こんな過酷な戦いをしているのか？」

俺は、首を横に振って、こんな悲劇があるものと慰めた。

俺たちは、街に引き返すと、口髭を生やした盗賊と盗品を教会に引き渡した。

カインは、未成年者モーリとマーシャとの契約、教会に許可なく契約の装備を解放した罰として、成人後三カ月間の儀式『初夜』参加禁止と、それまで数か月の教会清掃のボランティアを命じられた。「なんで？　なんでだよ！　悪いのは盗賊だろう！」

俺は、冒険者だったので盗賊討伐も、成人していたシャーロットとの契約も、全て御咎め^{おとが}なしだった。それどころか、盗賊討伐及び盗品回収の報奨金として二百万Gを渡された。

「アルは、大ばか者です。私を連れていれば、そんな盗賊なんて屁でもありません」

俺は、実家から帰ってきたフェルミに「バカ」呼ばわりされると横面を叩いてやろうかと手を振り上げた。

「ここでフェルミを殴ったら、本当の大バカ者だぞ」

その手をシャーロットが抑えていなければ、フェルミとの関係が終わっていただろう。

「俺が馬鹿なら教会の連中は、なんなんだ？　神様か？」

「よく聞くのです。教会は、カインを癒そうと罰を与えたのです」
フェルミは、俺の目の前で人差し指を真っ直ぐに立てながら言った。

「カインを癒すだと・・・」

「このまま何の罰もないまま、カインを帰してしまつては、彼の罪悪感が消えることなく、後々の冒険者としての生き方を狂わせていたでしょう。教会清掃のボランティアを通して、彼の心を癒すことは、教会の赦しでもあるのです・・・難しい話でしょうか？」

フェルミは、学校の先生みたいに俺の頭を撫でてくれた。

「ボクは、カインのことも心配だが、教会から突き放されたアルの方が、もっと心配だぞ」

シャーロットは、俺の両肩をグツと力強く握った。

二人とも慰めているつもりだろうか？

気分が落ち込んでいるときは、人肌が有難い。

「アルは、冒険者だから教会の助けを必要としてはいけません。教会を助けるのが、冒険者なのです・・・ところで」

フェルミは、俺の目をジッと見つめて、

「なぜシャーロットは、私たちの部屋に上り込んでいるのでしょうか？」

俺は、色々あつてシャーロットとの契約を、ちゃんと説明していなかった。

フェルミは、何か怪しいぞと前髪をピコピコと揺らしながら睨んでいる。

「そ、そうだ・・・エラハイと合流する前に、もう一度だけ『初夜』に参加してみないか？ 力試してやつでさあ・・・ついでに剣技の修行を兼ねて、シャーロットも森に行ってみたってさ・・・」俺は、シャーロットとの関係を伏せて、メダルを手に入れたかった。

シャーロットは、両手を挙げて、知らないよのポーズで誤魔化した。

「シャーロットから契約者の匂いがします。それにアルからは、装備の匂いがします。ヤツたなら、ヤツたと報告するのが、筋つものではありませんか？ 私は、隠し事と嘘が大嫌いです」

シャーロットは、顔を赤くして右手を挙げると、右脇の下のペンタグラムの匂いを嗅いでいた。

「そ、そうかな・・・アルの匂いなんて、べつにしないよね？」

な、なぜ俺に同意を求めるんだ！ それにお前は、乙女を失っているはずなのに、フェルミに刻印を見せたらバレるだろ！ 「うん、しない」とか嘘に嘘重ねたら、フェルミに前から後ろから殺られるぞ？

「私は、アルの匂いとは言っていないけど？　まだ、神前契約式から一カ月しか経っていないのに、もう愛人を囲いやがったですね（笑・・・ってない）」

俺は、今回の事件で致し方なくシャーロットと契約したこと、彼女の武器としての性能がずば抜けて優秀なこと、俺のお気に入りのの装備が『鎧』であり、毎晩『鎧』を装備したまま寝たいと力説した。解りました、これから毎晩『鎧』を着て寝てもらいます」

「は、はい、毎晩一緒に寝ましょうね」

「それからシャーロットは、すぐに教会で、アルとの契約を解放してもらいなさい」

「なんで、アルとの契約を解放しなきゃいけないんだ？　アルとの契約は、ボクが決めたことだ」

「今回の契約は、事故のようなものだから、犬にかまれたと思って解放しなさい」

「あの契約は、事故だったのかい？」

シャーロットは、潤んだ瞳で俺を見つめていた。

「えーと、そうですね・・・事故のようなものと言えば、まあ事故のような気がします」

「私も鬼ではありませんから、二人とも初犯なら一回は、水に流して許しましょう」

フェルミは、俺とシャーロットがヤツたことを怒っている。

「ボクは、アルの『魔法剣』だ！　フェルミより価値があるんだ！」

「装備おんなの価値は、どれだけ特赦効果を沢山持っているかです！」

シャーロットは、ニヤリと笑った。

「アルは、一回の戦闘で二回（個）も新しいスキルを開発してくれたぞ。フェルミは、何回くらい新しいスキルを開発された？」

彼女の「二回も」の言葉に、さすがのフェルミも「〇回」とは、言い返せなかった。

剣士と騎士の『鎧』では、体の相性が悪いのかもしれない。

フェルミは、目に涙を貯めながら机に登ると、堂々と立ち上がって仁王立ちした。

「アルの二号さんとして認めてあげますが、アルと一緒に寝るのは却下です。アルの腕枕は、第一夫人の私のもんです！」

「二号さんでも、三号さんでも、一緒に旅ができるのならボクは、どうでも構わないぞ」

第一夫人とか、二号さんって・・・俺たち結婚してないじゃん？

こんな調子で装備コンプリート出来るのかよ。

俺の武器と装備は、組合せが最悪な気がする。

ボクが決めたことだ（後書き）

契約の装備が、新たなスキルを得たとき『』で表示します。
女体の神秘が伝わらない男性に解りやすい親切設定ですね^^

ボクが恥ずかしいだろう

シャーロットとの契約は、突発的なことだったので、彼女のご両親への報告が後先になってしまった。本来ならば、契約前に相手方のご両親に、挨拶するのが常識人というものだ。

「俺は、叔母さんに何て言えばいいんだろう」

「ボクの母さんは、鍛冶屋のライダー家から、剣士の刻印が誕生したことを自慢していたぞ」

俺は、シャーロットと二人で彼女の実家に、挨拶に行くことになった。ウチの両親からは、勝手に契約の装備を増やしたことに、勘当される勢いで怒鳴られたものの、盗賊に襲われた状況を説明して、どうにか理解を得られた。

「シャーロットのお母さんは、俺のお袋に似て勝ち気な性格だからな・・・箱入り娘を傷物にした俺としては、どんな仕打ちが待っているのか、想像するだけで恐ろしいよ」

と、俺が言うとシャーロットは、高笑いをしながら背中を叩いた。「アルとの契約は、ボクからお願ひしたことだ。そのことは、ボクから両親に説明済みだよ」

俺たちは、街の中央通りから石畳が続く路地に入った。

彼女の実家を訪ねるのに、手土産を買うためだ。

この路地には、小さな商店が道いっぱいに籠を並べており、歩くにも困難な場所だ。しかし中央通りの観光客相手の高級店に比べて、安くて上質な食料品などが売られており、手土産にピッタリなケーキ屋だって数多く出店している。

「果物は、けっこう値段が高いんだな」

俺の目に留まったのは、店先の籠に果物を積み上げたフルーツパラー『愛社堂』だった。

「ボクは、ブドウが好きなんだけど、ブドウって六千Gもするんだね・・・おい、メロンなんて二万五千Gもするぞ」

「普段は、家に有る物を食っているから気にしてなかったが、果物が値の張る食い物だったとは、ちよつとした驚きだ。メロンなんて、オーク退治の報奨金と同じだぜ」

「冒険の旅では、メロンを一個食べるにも、オーク一匹退治する必要があるのか」

シャーロットは、果物屋の値札をメモに取ると、フェルミから預かった封筒から二万Gを取り出した。

彼女が値段を書き留めているのは、金庫番のフェルミから街で食料品の相場を調べてくるように、言い付かつていたからだ。

訪れた街の相場を把握するのも、これからの冒険に備えて必要なことだ言われた。

「手土産は、このブドウで良いだろう。ボクの両親は、ボクのブドウ好きを知っているから、お持たせで食べられるかもしれない」

「ブドウの季節だし、それで良いだろう」

シャーロットと従兄妹の俺が、洋服の趣味や、食い物の好き嫌いが同じなのは、ライダー家の遺伝によるものだろう。もしくは、魔法剣と剣士が関係しているのかもしれない。

フェルミの買い物に付き合わされたときは、洋服一枚買うにもウンザリするほど時間がかかったのに、シャーロットとの買い物だと軽快に物事が決まった。

「ただいま！ アルを連れてきたよ！」

シャーロットは、玄関扉を勢いよく開くと、これでもかと大きな声で両親に俺の来訪を伝えた。

彼女の自宅は、魔法使いの父親が魔道書の研究に没頭するため、街中心部にある大きな図書館の一角を間借りしていた。

「しかし、いつ来ても広い屋敷だな」

俺は、石造りの書籍庫を改装したシャーロットの家の広さに、い

つも圧倒されている。

「父さんの仕事関係の借家だから、どの部屋も魔道書で埋め尽くされて、使える部屋が少ないけどね・・・どうしたんだい？」

シャーロットは、腰に下げていた秘剣スイートソードを無造作に、玄関の傘立てに放り込むと、玄関扉の前で畏まつて^{かしこ}いる俺に声をかけた。

普段の俺なら無遠慮に上がる込むのだが、今日ばかりは、叔母さんの許しを得ないと敷居を跨ぎづらい気分だ。

「あら、ずいぶん早かったのね」

シャーロットのお母さんは、鼻にかけた眼鏡がなければ、俺の母親と区別が付かないほど似ていた。

応接室に通された俺は、緊張のあまり手土産のブドウを抱えたまま、渡すタイミングを逃していた。

「あつ、あのシャーロットは？」

「あの子なら、部屋で着替えてから来るわよ」

「ああ、そうですか・・・この紅茶、ウチのより美味しいです」

「貴方のお母さんから頂いたものよ」

「よく考えたら、同じ味でした・・・煎れ方が違うのかな？」

「今度、あの子に煎れ方を教えておくわ」

「シャーロットには、紅茶なんて似合いませんね」

俺は、紅茶に口を付けながら上目使いに、叔母さんの顔を見た。

「何か、言いたいことがあるのでしょうか？」

睨み付ける眼光は、契約の装備時代に『絶対零度の氷剣』の異名をとった女性だ。

「は、はい・・・そのお嬢さんを、僕に頂けませんか？」

「頂くも何も、もう頂いちゃったのでしょ」

「は、はい・・・すみません、頂いちゃいました」

「頂いちゃってから、何を言いに来たのかしら？」

「えーと、お嬢さんを頂いちゃった報告ですかね？」

「そんな報告、聞いたことがないわ」

「ですよ」

叔母さんは、俺の手土産を指差した。

「代わりに、それを寄こしなさい・・・あとで、皆で食べましょう」

「は、はい、頂いちゃってください」

俺は、緊張のあまり下腹が痛くなってきた。

叔母さんがブドウを持って部屋を出ていくと、入れ替わりに真紅のドレスを着たモーリと、ピンクの同じデザインのドレスを着たアーシャが部屋に現れた。

彼女たちは、表情を強張らせていた俺を見ると、大きな溜息を吐いた。

「どうしてシャーロットは、アルなんかと契約したのかしら？」

モーリとマーシャは、剣技の修行に明け暮れていたシャーロットにとって、親友と呼べる数少ない友達だった。性格も属性も違う彼女たち三人が、仲良くなった理由は、乙女でないと噂されていたシャーロットのことを、モーリやマーシャだけが色眼鏡で見なかったからだ。

「なんでお前らは、正装しているんだ？」

「はあ？ アンタ馬鹿じゃないの？」

モーリは、ふんわりしたスカートの裾をたくし上げると、俺と向かいの席に足を組んで座った。彼女の席の後ろには、子分のマーシャが自分の居場所を見つけて立っていた。

「本当にアルは、お馬鹿ですよ」

マーシャは、モーリの意見に同調するように言った。

ここ最近、俺のことを馬鹿呼ばわりする女が増えているのは、由々しき事態だ。

「だから、正装している理由を聞かせるよ」

「シャーロットの契約式の見届け人だからよ。先月は、フェルミの

契約式、今日は、シャーロットの契約式、ご祝儀代も馬鹿にならないわよ。私とカインの契約式には、二人分のご祝儀包んで来いよ！」

「契約式って、これから？　だって俺たちは、既に契約済みだぜ」

モーリは、組んでいた足で机を蹴飛ばした。

「女の子にとって契約は、遊びじゃないのよ！　人生掛けてるのよ！　契約式も挙げないで、命がけの冒険が出来ると思ってるのかよお！」

「仰る通りです・・・これから俺の式なんですね？」

「てめーのじゃねーよ、シャーロットの契約式だって、さっきから言ってるだろう？」

カインのいないときのモーリは、大抵こんな感じで俺に食って掛かる。

もしかして俺に、惚れていたのだろうか？　そんなわけないか。

「アル、ちょっと来なさい。モーリとアーシャは、少し待っていて頂戴ね」

俺は、叔母さんに呼ばれるままに玄関ホールに来ると、そこに続く階段には、黒い伝統的な魔法使いの衣装を着た叔父さんが座っていた。

「やあアル、久しぶりだね」

「伯父さんとお会いしたのは、何年ぶりですかね」

シャーロットの父親は、この家の地下で魔道書の研究に明け暮れて、もう何年も穴蔵生活をしていた。

「私は、食事の時以外、あそこから出てこないかね」

「本当に叔父さんは、研究熱心ですよ」

「そういえばアルは、オシリス家のお嬢さんと契約したそうだね。

式には、参列できずに申し訳ないことをしたね」

「いいいえ、たいした式じゃありませんでした」

「そんなことはないよ、女性にとって契約と言えば、人生を左右する重大事なのだからね」

それは、挨拶もなしに娘と契約した俺を、非難する言葉でしょうか。

「叔父さんは、どんな研究をしてるんですか？」

「・・・親の承諾もなしに、娘の契約を不可能にする研究だよ」

「それは、面白い研究ですね・・・」

「少し遅かったみたいだね」

叔父さんは、階段から見下ろすような目で俺を見ていた。

死んだ魚のような、虚ろな目で。

「冗談だよ」

叔父さんは、目尻を下げた笑った。

俺と叔父さんの会話が終わると、叔母さんがモーリたちも玄関ホールに呼び出した。

「シャーロット、もう良いから下りていらっしやい」

叔母さんが声をかけると、階段の上に純白のオフショルダー（肩を出した）ドレスに身を包んだシャーロットが現れた。

手に持っていた薔薇のブーケは、彼女の『魔法剣』のように純白のドレスに赤く染えていた。

その姿を見ていたモーリとアーシャは、口を開けて眺めていたが、たぶん俺も、そんな感じだったに違いない。

ほんの数秒の出来事が永遠に感じられるほど、彼女に見惚れていた。

「あまりジロジロ見るんじゃない・・・ボクが恥かしいだろう」

シャーロットは、ここで契約式を行うと知っていたのだろう。

階段に腰を下ろしていた叔父さんは、シャーロットを階段の下までエスコートすると、俺の前まで彼女を連れてきた。

「アル、娘のことを宜しく頼むよ・・・泣かしたら、ただじゃおかんぞ」

叔父さんの最後の台詞は、本音だろう。

「シャーロット、正式に契約を申し込むよ・・・俺と契約しておくれ」

兄妹同然に育って俺は、彼女のことなら何でも知っていると思っていた。

だけど俺は、目の前にいる美しいシャーロットのことを何も知らなかった。

「ボクは・・・アルの契約の装備になりたい・・・」

シャーロットは、右手で頭の後ろを押さえるように、少し状態を逸らして脇の下を皆の前に晒した。

その姿にモーリは、顔を真っ赤にして手で覆っていたが、あまりの艶かしさに直視できなかったのだろ。

俺は、契約の証を立てるため、見届け人の前で彼女の刻印にキスをした。

閃光の中、彼女のドレスが虚空に消えて、俺の手に彼女の感情が伝わってきた。

刻印の痛みなんて感じないほど、感動的なシーン。

友人と家族が見守る中、シャーロットは、俺の手に収まった。

「踊り狂う魔法剣ブラッディローズ」

その『魔法剣』は、剣先もブレることなくシャンとしていた。

契約式は、俺の『魔法剣』を彼女の友人二人が称えて終了となった。

「娘のことは、頼みましたよ」

叔母さんは、装備解除したシャーロットの髪を結び直しながら言った。

「もちろんです」

「娘は、剣士の貴方に勿体ない契約の装備です」

「はい、そのとおりです」

俺は、背筋を伸ばして返事をした。

その姿は、家を訪れたときと同一人物を思えないほど、ハキハキしていたので、叔母さんも思わず笑い出してしまった。

「シャーロットは、刻印が刻まれた日、貴方から花束をもらって、ほかの契約を全て断ったのよ・・・単なる風習なのに、貴方からの契約申し込みが、よほど嬉しかったのね」

「ボクは、そんなこと覚えてないよ」

「お母さん、皆に断るのが面倒だったから「ウチの娘は、もう乙女じゃないのよ。もう男の子とやりまくりよ」って、ご近所に言っただけだよ」

「そうだったの？ 有難うお母さん」

「おかげで変な男に言い寄られなくて、良かったでしょう？」

叔母さん、色々と間違ってる気がする。

「叔母さんのおかげで、ヤリマンのシャーロットとか不名誉な噂が流れたんじゃないですか」

叔母さんは、髪を結っていたブラシを俺の顔面に投げつけた。

俺は、シャーロットの気性の荒さが母親譲りだと理解した。

俺は、シャーロットが家族や友人と過ごすというので、彼女を残して一人で家路に着いた。

彼女の自宅から出ると、すぐ目の前の大きな木の下に、フェルミが足元の石を蹴飛ばして、不機嫌な顔で立っていた。

「なんだよ、近くにいろのなら、フェルミも契約式に顔を出せば良かったのに？」

俺は、フェルミの傍に駆け寄ると、引き出物にもらった袋をフェルミに渡した。

「要らない・・・」

「引き出物には、フェルミが好きな鯛の尾頭付きとかお赤飯とか入ってるぞ」

「そんなもの要らないです。鯛の尾頭付きは、好きじゃなくなりました」

フェルミは、そう言っただけで俺の数歩前を歩き出した。

「お赤飯は？」

足早に歩くフェルミの後ろから、俺も追いかけるように小走りになった。

「お赤飯も好きじゃなくなりました」

「何怒ってるの？」

「契約の装備になったら、同じ契約者の契約式に参列できない決まりがあります」

「そうなの？」

「だから今日一日は、シャーロットとのデートを許可しました」

「だから今朝、不機嫌だったのか？」

フェルミが急に立ち止まったので、後ろから追っていた俺は、彼女の背中にぶつかった。

「今も不機嫌です・・・そんなことも解らないアルは、大ばか者です」

俺は、肩を震わしているフェルミの後ろから抱きしめると、彼女の横顔に頬を寄せた。

「機嫌直してくださいよ」

「シャーロットには、今夜帰らないように言っておきました・・・今夜は、約束どおり『鎧』を着たまま寝てもらいます」

「解りましたよ」

「そうすれば、いつか剣士の『鎧』になるかもしれません」

俺は、フェルミの手を繋ぐと、路地裏のケーキ屋に向かった。

フェルミの好物の一つで、彼女の機嫌が直れば安いものだ。

ボクが恥ずかしいだろう（後書き）

人気装備ランキング【常設】を設置しました。
お気軽に投票してあげて下さい^^

今回、契約バトルが無くてすみません^^；
皆様、良い週末をお過ごしください。

ボクの出番が少ないぞ

「アルは、知っているかい。教会の床は、湿らせた大鋸屑おがくずを撒いて、掃き掃除をするんだけど、松の大鋸屑を使つと、松脂のワックスで床がピカピカに輝くんだよ」

カインは、目を輝かせながら教会の清掃ボランティアで得た知識を、カフェ『冒険の木』で俺に披露している。

「そいつは、知らなかったな」

知っていても、冒険に役立つ知識でもないと思う。

俺は、盗賊討伐の際、盗品だった女の命を奪ってしまったカインが、落ち込んでいるだろうと、教会に寄ってみれば、大勢のボランティアを指揮して働く、イキイキとした姿があった。お掃除好きの英雄だ。

所詮人間なんてものは、フェルミの言うとおり、与えられた役割があれば、そうそう塞込んでもないらしい。

「教会の仕事は、充実して楽しいよ。アルも、嫌なことがあったら足を運んでみると良いよ」

「・・・いつから、お前まで信心深くなったんだ？」

毎朝、教会に向かつて祈りを捧げているフェルミは、幼い頃から週末の礼拝を欠かさず、俺の出来の悪さを信心の無さに例えて説教する。

俺も子供の頃は、両親に連れられて礼拝にも通っていたが、学校に通い始めると、休日を自分のために使うことにして、礼拝に通わなくなっていた。

「宗教は、心を平穏に保つ癒しの拠所だよ」

「俺にとって教会は、戦利品の換金所みたいなものだ」

「そうか・・・では、契約の装備を充実するのに、教会が役に立つと言っただら？」

「どういう意味だ？」

カインは、椅子から腰を浮かすと、前屈みに近付いた。

「ここだけの話だが、信心深く礼拝に通うのは、年頃の女の子が多いんだよ。僕も学生時代は、礼拝なんて馬鹿にして通わなかったけど、毎週決まって礼拝に参加するような女の子は、慎み深く清らかな乙女が多くて驚いたよ」

俺は、鼻の穴を広げてカインの話を聞いた。

「そ、そう言われてみれば、フェルミを筆頭にして礼拝に通っていた女子は、みんな清楚で可憐なお嬢様が多かったな」

「なぜ気が付かなかったのかと、僕も後悔したよ……アルも礼拝に参加したくなっただろう？」

カインは、俺の顔を伺うように切り出した。

「ちょっと待てよ……この手口は、新興宗教の誘いに似ているぞ？」

俺は、冷静になって考えてみた。

カインの話は、確かに頷けるものだが、彼の性格を考えれば、契約の装備をエサにして俺に礼拝を受けさせる意味が解らない。

「お前、何か企んでいるだろう？」

俺は、カインの目をジッと見ながら言った。

「い、いや、何も企んでなんかいないよ。ただ、冒険の旅に出る前に、無事を祈っても良いだろうと……」

「本当のことを話せよ」

「……俺から聞いたと言わずに、今度の礼拝に来てくれるなら、真相を打ち明けるよ」

カインは、椅子の背もたれに深く腰掛けると、諦め顔で言った。

「つまり教会では、未契約の装備おんなを冒険者に斡旋あつせんしているのだな。

俺に契約を望んでいる女の子と、お見合いをしろと言うのか」

サウスファイア王国の人口比率は、男女ほぼ同等なのだが、男性の刻印の多くが『Tr（旅人）』に対して、女性全員が何かしらの契約の装備たる資格を有している。

ウェディングでは、多くの女性が冒険を望んでおり、特定の装備おんなを除いて過剰供給になっているのだ。

「簡単に言ってしまうば、そういうことになるな」

「しかし、武器商人の真似事を教会が裏でしているとは、信じられない話しだな」

「武器商人で売買されている装備は、金で買われた装備や、盗品がほとんどだが、教会で斡旋している装備は、本人たちが契約を望んでいるし、相手が気に入らなければ、断れることもある。教会は、出合いの場を提供するだけで、本人たちの自由意思に基づく契約だよ」

カインは、ガラナジュースを飲み干すと、事情を説明したのだから礼拝に参加しろと迫ってきた。

「装備を充実したいのは、山々なのだけど、シャーロットと『初夜』を済ませたばかりだし、まだ冒険者としても実力のない俺が、これ以上の装備を増やすのは厳しいぞ」

俺は、エラハイの住んでいる隣街に出かける前に、シャーロットとの『初夜』を済ませて、契約の痛みを緩和するメダルを手に入れていた。

ここで新たな契約の装備を入手しては、来月の儀式が開催されるまで、街に足止めを喰らうことになる。

「そう言うだろうと思って、礼拝を口実に呼び出そうとしたのだが・
・・」

「誰のアイディアだよ」

「僕が斡旋の話を教えたと言うなよ・・・ミリアムから、アルを礼拝に参加させるように頼まれた」

「ミリアムって、あの級長だったメガネか？ 彼女には、俺に斡旋

したい装備があるのか？」

ミリアム・S W・ハイムは、俺たちが通っていた学校でクラスメイトだった女だ。彼女は、目立つような女の子ではなかったが、芯のしっかりした娘で、教師からの信頼も暑く、中・高卒業まで級長を務めていた。真面目な娘。

「そこまでは聞いていないが、彼女は熱心な信徒だから、多くの冒険者を集めて、契約を望む装備を宛が^{あて}いたいのだろう」

「装備仲介の世話焼きか・・・ミリアムは、卒業しても相変わらずだな。お見合いには、カインも参加するんだろうな？」

「僕は、まだ儀式の参加資格を剥奪されているからね」

「だけど成人したのなら、契約が可能だろう」

「お見合いは、冒険者しか参加できないんだ」

カインは、街を行き交う人並みを見ていた。あれほど冒険を楽しみにしていた彼は、盗賊との戦闘以来、冒険に対しての熱意を失いかけ、どこか達観するようになっていた。

「今回だけは、カインの顔を立って参加してやるよ」

「そうか！ ミリアムも喜ぶよ」

「参加するだけで装備との契約は、絶対に出来ないと思うぞ」

俺は、今の装備を使いこなすまで、新たな装備を手にしないと決めていた。

礼拝当日の朝は、シャワーを浴びて身綺麗にしてから朝食を食べた。

「ボクたちは、旅に出る手続きに不動産屋と役所に行くけど、アルも一緒に行くかい？」

シャーロットとフェルミは、冒険の旅に出るため部屋を引き払う

準備をしていた。

「今日は、カインに誘われて、礼拝に行くことになってるんだ・・・役所には、君たち二人で行ってくれ」

「あら、無信心のアルが礼拝に参加するとは、こういった風の吹き回しかしら？」

フェルミは、ほかの装備おんなのことに敏感に反応する。

「旅の安全を祈願するだけだよ」

「殊勝な心掛けですね・・・では、私も一緒にします」

「えーと、シャーロット一人だと心配だ」

「なら用事を済ませてから、三人で行きましょう」

「俺は、君たちが仲良くなるように気を回してるんだよ・・・二人で行きなさい」

装備に対して毅然とした態度で接するのも、多くの装備を身に纏うための契約者の条件だ。

「解りました。私は、シャーロットと出掛けることにします」

フェルミは、とても冷たい目で俺を睨み付けると、抑揚のない言葉で言った。

俺は、彼女の見透かしたような態度に、背筋が寒くなった。

教会の帰りにケーキでも買っよう。

教会の前には、カインと修道服に身を包む女性が待っていた。

「カイン、彼女は？」

俺は、ローブから覗く女性の顔を見ながら、目鼻立ちの端正な彼女に見覚えがある気がした。

「ああ紹介するよ、彼女は、リリイ・S・W・ブランドン」

「カインの友人のアルフレッドです・・・何処かでお見かけしたよ

うな？」

と、俺が言うとカインは、右手のグローブを外して、掌をこちらに向けた。契約者は、自分の適職を敵（他人）に知られぬように、全員がグローブで手の甲の刻印を隠している。同様の理由で、自分の装備を晒して手の内を読まれぬように、露出が少ない服装でいる契約者も少なくない。

カインが晒した右手には、『剣』の刻印があった。

「リリイは、僕の契約の装備で、盗賊たちの盗品だった娘だよ」

リリイは、カインが手を切り落とした盗賊の装備だった娘で、彼が契約解除を行った元盗品だ。

「あのときの娘か・・・なかなかの拾い物だよ、良い装備じゃないか」

俺は、カインの『剣』を褒めてみたものの、若い彼に釣り合いの取れる年齢ではないと思った。

「彼女は、既に『毒』『迷惑』の特殊効果が二個も付加されている。僕には、勿体ない『剣』だと思うよ」

カインに褒められたリリイは、頬を赤らめて俯いてしまった。

俺は、カインが自慢した特殊効果『毒』『迷惑』が、リリイの年齢を考えれば上限（付加限界値）だと思った。確かに端正な顔立ちの彼女は、切れ味が鋭く、安定したクセのない太刀筋を見込めるが、若い英雄のメインウエポンとしては、物足りない気がした。カインが彼女と再契約した理由が同情ならば、彼の精神状態は、完全に回復していると言い難かった。

「アルフレッド様、その節は有難うございました」

リリイは、見た目通り礼儀正しい装備だ。

「カインは、冒険者の夢を諦めたのか？」

「僕が冒険者にならなかつたら、モーリに殺されてしまうよ。彼女は、冒険の旅に誰よりも憧れているからね」

「そうか、それを聞いて安心したよ」

カインは、英雄に相応しい契約者だ。冒険者となる儀式を終える前に、既に『鎧』『盾』『剣』の装備を携えている。俺は、冒険者なのに二つの装備すら満足に扱えていない。剣士と英雄の格の違いを見せつけられた気がした。

礼拝堂には、既に多くの信者が集まっており、神父の講話を静かに聞いていた。

俺は、入口から入ってすぐ脇の壁に背中を付けると、立ったままの状態で祈りを捧げた。

席に座らなかった理由は、冒険者の仕事に背後からモンスターに襲われてから、人の集まる場所で背中を晒すことに臆病になっていたからだ。

「アル君、お久しぶりですね。私のこと覚えているかな・・・級長だったミリアムです。私、卒業してから、ここの教会で働いているのよ」

礼拝が終わると、偶然を装ったミリアムが声をかけてきた。彼女は、白いブラウスに、濃紺のタイトスカートこそ大人びて見えたが、赤い丸縁のメガネや、真直ぐに切り揃えられた前髪、おずおずと話す仕草は、学生時代のそれと変わらなかった。

「もし時間があるのなら、冒険者のアル君に見てもらいたい装備があるんだけど」

彼女は、俺の同意を得るのもそこそこに、教会の裏手にある修道院に手を引いて案内した。

案内された白い土壁の小部屋が、装備と冒険者のお見合い会場なのだろう。

「もし紹介する装備が気に入ったら、私が最後に聞きに戻るから、そのとき伝えてね」

「あ、あのな級長、俺は、装備のことなら間に合っているよ・・・」
「あつ、もしも気に入った装備があっても、ここで勝手に契約しちゃダメよ」

「俺が辺り構わず契約するほど、発情していると思っているのか」
「アル君は、剣士だからお相手は『剣』がいいよね？」

ミリアムは、自分勝手に納得して、俺を残して部屋を出て行った。
俺は、ミリアムの事務的な対応に、こんなに人の話を聞かない奴も珍しいと思った。

お見合いは、三人目まで冒険談を聞かせたりして、お茶を濁していたものの、四人目からは、もう相手の話だけを聞いて過ごしていた。日の傾きかけた頃、似たように自己紹介ばかり聞かされ、八人目になると、退屈のあまり欠伸まで出てきた。

彼女たちは、良くも悪くも普通な『剣』で、良く言えば「まじめ」、悪く言えば「地味」、合わせて言えば「まじめで地味」。彼女たちは、普段の生活が地味だから、冒険に憧れているのだろう。

「アル君、十人目の彼女が最後だったのだけれど、誰か気に入った娘がいた？」

休憩も入れずに十人とお見合いさせられた俺は、もう最初の一人目の顔すら忘れてしまった。

「うーん、特技が掃除と洗濯で、契約後の特殊効果に『幻獣召喚』を欲しがっていた『剣』がいただろう」

「何人目の娘かしら？」

「犬を召喚してペットにするらしいよ。その話が今日聞いた話で、一番面白かった」

「そ、そうだよね・・・犬は、幻獣じゃないよね」

ミリアムは、溜息を吐いくと、持っていたノートで顔を半分隠した。

「・・・なら、私と契約する？」

「な、なんで級長と俺が、契約するんだよ？」

彼女の提案に驚いた俺は、椅子を倒して立ち上がった。

「だって、剣士が旅するのに『剣』がないと、何かと不便でしょう？」

「級長には申し訳ないけど、シャーロットミリアム以上の『剣』が、この世に存在すると思えないんだよ」

彼女は、ノートの上から顔を覗かせて目を丸くした。

「シャーロットさんと契約したの？ 彼女は、乙女じゃなかったはずよ」

「ああ、あれは人払いの嘘だったらしいよ、彼女は、ちゃんと乙女だし、俺の『魔法剣』だよ」

シャーロットとの契約式は、身内だけで執り行っており、ミリアムが知らないのも無理はない。

「そうだったの？」

「だから、級長の申し出は嬉しいけど、その気持ちだけ受け取っておくわ」

「ち、違うのよ、べつに私がアル君と契約したいとか、そんな意味じゃないのよ・・・アル君、あんまり剣技の成績が良くなかったから、心配しちゃって」

ミリアムは、恥かしさのあまり火照った顔をノートで煽いだ。

「なんだよ、そんなに俺の剣技が弱いと思っていのたのか？」

「うん」

「否定しないのかよ・・・学校では、スキル発動が禁止だけど、実戦ならカインとも渡り合えるぜ」

「そうなんだ」

「そうだよ」

ミリアムは、緊張を解いたのか、硬い表情を崩して笑った。

「シャーロットさんも乙女のままだったし、アル君も何の心配なく送り出せるわ」

「級長は、世話焼きが過ぎるよ」

と、俺が言うとミリアムは、

「私は、いつだってクラスの皆のこと心配してるんだ。だって私は、級長だからね」

卒業後のクラスメイトなんて普通は、あつという間に過去の人だろう。

落ちこぼれのクラスメイトの旅立ちを心配するなんて、級長は馬鹿だろう。

「級長は、世話好きが過ぎるよ・・・けど、心配してくれて有難う、マジで有難うな。それから、級長みたいな真面目な奴は、きっと良い契約者の『剣』になると思うよ」

「うん」

ミリアムの真っ直ぐ笑顔を見た俺は、自分がどれだけ多くの友人に支えられているのか。それら友人の支えをどれくらい自覚できているのか。たぶん俺は、ほとんど自覚出来てなかった。

「級長が素敵な契約者に出会ったために、一つだけアドバイスしてやる」

「なにになに？」

「ここぞというときは、契約者の前でメガネを取れ」

「なんで？」

俺は、学生時代にメガネを外したミリアムの顔を見たことがあった。

彼女の近視で潤んだ瞳は、フェルミとシャーロットの次くらいに素敵な瞳だ。

素顔のミリアムなら、どんな男も契約を申し込むだろう。

「それから・・・いいや、何でもない」

俺は、カインの面倒を頼もうとしたが、ミリアムが傍にいれば心配いらないと、余計なことを口にするのは止めた。

「けどアル君は、凄いのよ」

「俺の何処が凄いのよ？」

「だってフェルミとシャーロットは、学校の成績で一、二を争っていた才女だよ。その二人を自分の契約の装備にしちゃうなんて、本当に凄いのよ」

俺は、契約者の前でメガネを外す本当の理由を付けずに、ミリアムに見送られて修道院を後にした。

それから一週間後、俺たちは生まれた街を出て、エラハイの住む隣街へと旅立った。

ボクの出番が少ないぞ（後書き）

次話、隣街までの冒険です^^
リリィとミリアムも人気装備ランキングに入れておきます。

ボクの夢はいつか叶う

「はうっ！」

フェルミは、右前方からのプリースト・グラスマンの攻撃を避けきれずに、肩口に一撃を喰らってしまった。俺が剣で攻撃を防いで、左後方に飛び退けようとしても、彼女がそれを拒んだためだ。

「ボクは、イけるよお！ そのまま左から突き上げてえ」

俺は、シャーロットの言葉を信じて、トカゲの司祭（プリースト・グラスマン）の左脇腹から首筋まで『魔法剣』で切裂くと、剣士のスキルを発動することなく、半身を失ったトカゲの司祭は力なく崩れた。

エラハイの住む隣町までは、定期運航している乗合馬車を使えば二日で到着する距離なのに、出立してから四日目の俺たちは、まだ道程の半分も進んでいなかった。

「フェルミの体調が悪そうだから、無理せずここで野営をしよう」

彼女達を装備解除した俺は、まだ戦闘の興奮で息の上がっているシャーロットを草むらに寝かせて、フェルミと二人で野営用のテントを張った。

フェルミは、虚ろな表情で、近くにいる冒険者のために赤い旗を立てた。

身を隠すところのない草原での単独野営は、夜間のモンスターの襲来に対応できないため、狩りをする冒険者同士が集まって夜を過ごす。彼女の立てた赤い旗は、ほかの冒険者を呼び集めるための目印だった。

「こんな早い時間から旗を立てても、良いものでしょうか？ もう少し時間を置いてから、旗を出した方が良いでしょう」

フェルミは、テントの中に戻ってくると、自問自答するように呟

いた。

赤い旗を見つけた冒険者は、体力に余裕があろうとも、先を急ぐ特別な理由がない限り、そこで野営を行いコミュニケーションを築くのが、決まりとなっている。

「ほかの冒険者の事情なんて、知ったこっちゃないよ。狩りを続けなければ、野営の周りで勝手に狩れば良いんだからね」

と、俺が言うところフェルミは、少し笑ってから夕飯の支度もせずに寝てしまった。

「アル、ちよつと良いか？」

俺は、テントの外からシャーロットの呼ぶ声が聞えたので、フェルミの体調が気になったものの、その場に残してテントを出た。

「フェルミの具合は、どうなんだい？」

シャーロットは、草むらに上半身を起こしてテントの中の様子を伺っていた。

「俺よりも、同じ契約の装備で同性のシャーロットの方が、フェルミの体調のことを解るんじゃないのか」

「ボクには、よく解らないけど、この旅に出てから日増しに、アルとフェルミの息が合っていないのは、よく解るんだ。そのせいで、ボクまで気が散っちゃって、なかなかイケなくて・・・」

盗賊との戦闘では、二つの剣技を開花させたものの、フェルミを装備した状態での戦闘では、まだ一つの剣技も特殊効果も目覚めることがなかった。

剣士には、重装過ぎる『鎧』が戦闘の足枷となり、『魔法剣』を活かし切れていないことが、シャーロットの集中力を欠く結果となっているのは明らかだ。

それでも彼女は、気丈にも俺との呼吸を合わせて、自ら快感を得ようと導いてくれているが、そんなとき決まって、フェルミが思い

通りに動かなかった。

「三人での戦闘は、二人の時よりも楽になると思ってたけれど。俺には、まだ二つの契約の装備を同時に扱うテクニクが足りない……」

「

フェルミとの初戦闘では、幼馴染の奥深い所で一体感を感じ、シャーロットの剣技を開花したときには、契約者としての自信もついた。

だが三人での戦闘は、自分の気持ちばかりが先行して、戦闘中の『鎧』と『魔法剣』を萎えさせている。俺が悪い。

本来ならば、契約者である俺がリードして、彼女たちに戦闘の快楽を与えるのが役目だ。

力任せに剣を振るだけの俺は、二人に愛想を尽かされても文句が言える立場じゃない。

「ボクは、アルとの戦闘が気持ちいい。アルが頑張ってるのに、イケなくてごめんよ」

俺は、シャーロットの申し訳なさそうな顔に、胸が張り裂けそうになる。

彼女が詫びる理由なんて、どこにもないと言うのに。

「シャーロットは、俺の思いどおりに応えてくれているよ……ちゃんと能力を引き出せないのは、俺のテクニクの問題だ」

俺は、シャーロットの頭に手を置くと、戦闘で乱れた髪を後ろに梳いてやった。

目を細めた彼女は、とても美しく、汗に濡れた髪は、凛々しくもあった。

日が傾く頃には、俺たちのテントの周りに三組の冒険者が集まっ

ていた。

野营地では、最初に赤い旗を立てたパーティが、狩りの獲物で作った料理を振る舞うのが、この地方での風習だ。

この風習は地方毎に特色があり、周回軌道上の太陽から離れた南の寒い地方では、夜も短く周囲にモンスターも少ないため、酒を振る舞ってダンスを披露して羽目を外して騒ぐらしい。

俺たちの冒険の旅に目的がないのなら、各地を訪ね歩いて見聞を広げたいと思った。

だが、俺が目的のない旅だと言ったなら、テントで寝息を立てているフェルミに、怒鳴られるに決まっている。彼女の旅の目的は、モンスターを率いる魔王を討伐して、優秀な『鎧』としての名声を得ることだ。

堅実なはずの彼女は、多くの冒険者が数世紀に渡り挑み続けて、その居城にさえ辿り付けない魔王討伐が夢だなんて、少しロマンに過ぎる気がする。

「本音は、俺に魔王を倒させて、名を挙げさせたいんだろう。フェルミは、やっぱり可愛いよ」

シャーロットは、独り言を呟いてニヤニヤしている俺と一緒に、ほかの冒険者のテントへ、戦闘で倒したトカゲで作ったステーキを届けていた。

「アルの刻印が『Chef（調理師）』ではないのが、不思議なくらい料理が上手だね」

「刻印だけでは、人の資質が計れないからこそ、みんな成りたい自分を追いかけるんだよ」

と、俺が言くとシャーロットは、急に腕にしがみ付いてきた。

「ボクは、アルのそういう考えが好きなんだ」

「どういう考えだ？」

「ボクにも幼い頃からの夢があるんだ・・・それは、叶うだろうか」

？」

「シャーロットの夢なら、いつか叶うよ」

「そうか、ボクの夢はいつか叶うのか」

彼女の夢が何なのか？ いま聞くには勿体ない気がした。

まだ旅は、始まったばかりなのだから。

俺は、三組の冒険者に食事を配り終わると、フェルミの寝ているテントの横に、四組目の冒険者がテントを張っていた。

困ったことにトカゲのステーキは、品切れとなっており、材料となる肉も手元に残していなかった。

日が完全に暮れるまで野営を張らなかった四組目の彼らは、大きな焚火を囲んで既に食事の最中だった。

「無視する訳にも行かないから、事情を説明してくるよ。シャーロットは、フェルミの傍にいてくれ」

俺は、空手のまま挨拶に来た非礼を詫びると、四組目の冒険者は、赤ら顔で笑って許してくれた。

焚火の周りには、六人の契約の装備（フル装備）が座っており、その真ん中で、ほとんど下着姿の格好で酒を煽っているのが冒険者だった。

「君は、はじめの街から来たばかりか？」

俺たちが住んでいた街は、冒険者となるための通過儀礼『初夜』の森に最も近く、冒険者から『はじめの街』と呼ばれていた。

「生まれ故郷なんですよ。俺の名前は、アルフレッドと言います・・・えーと」

「俺の名前なら、ビンセントだよ」

「ビンセントさんは、何処から来たんですか？」

「旅で出会った冒険者同士は、初対面でも呼び捨てで構わないぞ。俺は、王都サウスファイアから来た」

彼は、そう言って立ち上がると、千鳥足に近付いて握手を求めた。

「その手の刻印は、『War（戦士）』なんですね」

ビンセントは、自分の手の甲の刻印を見つめてから「そうか俺は、戦士か・・・戦士だったのか？」と、何が面白いのか理解できなかったが、契約の装備たちと一緒に馬鹿笑いした。

「なんだ？俺のギャグが伝わらなかったのか？」

このオッサンは、完全な酔払いだ・・・。

「アルフレッドは・・・剣士か、剣士だったのか？」

と、似たようなフレーズを繰返して馬鹿笑いするのは、酔払いの特徴だ。

しかしグローブで刻印を隠している、俺の適職をどうやって見抜いたのだろう。

「君は、初心者で・・・契約の装備は『鎧』と『剣』だろう」

「そのとおりですが、どうして解るんですか？」

「右肩を下げて前に出して斜に構え、手を腰の小太刀に当てていれば、『剣』がメインウェポンの剣士だ」

「英雄の主装備も『剣』ですよ」

「彼らは、もつと正面に構えているよ」

「なるほど」

俺は、カインの立ち姿を思い出した。

「初心者 of 剣士には、複数契約するほど経験がなく、普通は『剣』のみだが、アルフレッドは、上半身が軽装な衣服なのに、脚をスリートで守っている。上半身は、契約の装備だから連れてきていない」
彼は、なかなかの観察眼の持ち主だった。

「初心者には、複数契約が難しいですかね・・・」

俺は、フェルミの調子が良くないことを相談すると、ビンセントは、足元の枝を二本拾って、一本を俺に渡した。

「アルフレッド、枝を剣だと思って構えてごらん」

俺は、枝を持った右手を下げて、腰を落とすと斜に切上げる体勢を整えた。

最初のリーフ・オークを疾風シルフィーネ零式で倒したときも、フェルミに剣技ハヤブサを披露したときも、腰を落としてから下から上へと切上げたが、これが俺のスタイルだ。

「珍しい構えだね・・・自己流かい？」

「そうです」

「なるほど、その構えが良くない。『鎧』の右側は、彼女の下半身だと知っているかい？」

「『鎧』は、右から左に巻き付く格好で精製されています」

「よろしい。では、切りかかっておいで」

ビンセントは、頭上高く枝を掲げたので、彼の左下から枝を打ち上げた。その刹那に彼は、手にした枝を振り下ろしたので、枝を盾代わりに左回転で後ろに飛びのいた。

「これは、全くよろしくない。彼女の調子が狂うわけだよ」

「？」

「『鎧』の能力開発には、成功したことがないだろう」

「はい。じつは、友人（カイン）も『鎧』の能力開発に成功していません。『剣』なら敵を切り裂くことで、『盾』なら多くの攻撃を受けることで、新たな能力を得られました。ですが、『鎧』の場合、致命傷になる攻撃を受けるわけにいきません」

「鎧の刻印を持つ女の子は、芯が強く見えて、とてもデリケートなんだよ。アルフレッドは、初手から彼女のケツを上を持ち上げたり、敵の攻撃に対してケツを向けたりしたら、彼女の気が散ってイけるものも、イケないだろう？」

「あつ」

「『鎧』がイケないのは、契約者の未熟さにあるんだ。彼女は、ここ数日間の戦闘で、イキたいのに寸止めされて、イケなかったんだ。君は、何日間も寸止めされても平気なのかい？ マゾヒズムに狂った『鎧』でもない限り、君のやっていることは拷問だよ」

「何日間も寸止め・・・」

「契約者には『暇があつたら撫で回せ、吐息が漏れた場所を重点的に責める』という格言があるんだが、君のことだから移動中に、ちゃんと装備を愛撫してないだろう」

エラハイの教えてくれたのは、契約者の格言だったのか・・・。

「そうですね、まあ移動中は世間話してます」

「愛撫もなしに、いきなり戦闘（本番）とは・・・俺は、常に右脇腹を撫でながら、剣の鍔を指で摘み、踵を大地に擦るよう歩き、籠手と盾が魅惑の音色を奏できるように手を振り、いつでも戦闘に備えている。まあ兜には、スティックな娘を選ぶことだな」

ビンセントの説明は、勇ましく歩く戦士の立ち振る舞いだ。

彼の話聞いていた六人の契約の装備は、顔を赤くして笑っている。

「俺は、むしろ大事なところだから、触ったらいけないのかと・・・」

「

「鼻歌交じりに装備の声（喘ぎ声）を聞き、語らぬはずの装備の声（喘ぎ声）に、耳を傾けるのが契約者^{おとこ}つてもんだろう！」

ビンセントは、親指を突き立てると、呆然としている俺に、

「Good luck! and Good night!（幸運を そして おやすみなさい）」

俺は、ビンセント先生に感謝を伝えると、二人の待つテントに走って帰った。

俺は、人生で二人目の師匠に会えたことを、神様に感謝した。

俺がテントに戻ると、寝ている二人を叩き起こして、『鎧』と『魔法剣』を装備して寝た。

当然だが、朝まで『鎧』の右脇腹を飽きるまで擦り、『魔法剣』の柄と鐔を舐めたりした。

翌日の朝、寝不足気味の三人でテントを畳むと、ビンセントに挨拶をして野営地を解放した。

フェルミは、目の下にクマを作っていたけれど、いつも以上に爽やかな朝だと笑顔で言った。

ボクの夢はいつか叶う（後書き）

ついにアルが覚醒しましたよ。
何がしたいんだ・おれ？

どうでも良いにゃん

「ふあっ！ 溢れてきちゃうよっ」

「まだイクなよ、シャーロット！」

トカゲの長兄マスター・グラスマンが率いるトカゲの家族に囲まれた俺は、前衛の頭上高くから剣を振り落とし、袈裟切りに奴の胸元へ剣を突き立て、そこで手を止めた。そのまま剣を振り抜かなかった理由は、^{わけ}返り血や、剣から滴るトカゲの血を、口を開けて待っているフェルミにも注ぎ込むためだ。

モンスターの青臭い血は、強いアルカリ性であることが知られており、極僅かだが塩素臭を放っている。この独特な臭いが苦手な契約の装備もいるらしい。男の俺には、嗅ぎ慣れた臭いだが、それが彼女たちの戦闘への興奮を高めているなら、思う存分嗅がせてやる。「ああ、この匂いダメえ・・・わ、私、もうダメになっちゃいますっ」

フェルミの「ダメ」が否定の意味じゃないと気が付いたのは、装備の「ダメ」と「イヤ」が背徳心の現れであり、彼女のような信心深い装備なら総じて「イキそう」と捉えろと、ビンセント先生の教えからだ。つまり彼女は「この匂いイキそう、もうイキそう」と言いたいのだ。

「アル、お、お願いだ、これ以上焦らさないでくれ・・・頭がおかしくなりそうだ」

トカゲの胸奥に留まっていたシャーロットは、全身に青臭い血を被せられて、柄を揺らしてトカゲを引き裂くことを強請ってきた。

「まだまだ！」

俺は、剣を肉に突き立てたままで裏に返すと、さらに根元まで深く肉塊に差し込んだ。

「ひいっ！」

仰向けにされた彼女は、思いがけない俺の行動に、身を硬くして

上体を逸らした。俺の攻撃に身を引いたつもりだろうが、彼女の逃げ込んだ先には、臭い袋（心臓）が待ち構えている。

ドツぱああああっ！

んぐツ・・・ゴクリッ。

彼女たちの喉を鳴らす音に「零さず飲み込めよ」と、声をかけた。シャーロットは、溢れだす液体を切先から鏝まで大量に浴びると、恍惚の輝きを放った。

「シャーロット、ここから連続してスキルを発動するけど、大丈夫かい？」

俺の呼びかけに応える声は、聞えなかったものの、ピンと張りだした切先が、次の獲物を欲しがっているのは明らかだ。

マスター・グラスマンの前には、まだ二匹のグラスマンと、杖を高らかに上げて呪文を唱えるプリースト・グラスマンがいた。攻撃魔法の準備をしているトカゲから攻撃をするのが、単独戦闘の定石なのだが、俺の『鎧』は、司祭が唯一唱えられる麻痺呪文を無効化する。

「剣技ジャックナイフ！」

俺の放った剣技は、トカゲの下腹部に命中し、肉が引き裂いて赤黒い道を開いた。俺は、醜悪な臓物を掻き分けるように、懐から剣技ハヤブサで入口を左右に弄った。下腹部の痛みには耐えかねたトカゲは、ギイイイッ！つと、喉の奥の器官を擦って叫びをあげたが、抵抗する様子もなく死を覚悟していた。

「シャーロット、力を抜け！ 入れるぞ！」

彼女は、俺の口角を上げた笑みに気が付いて、ヌラヌラとした穴に、剣を突き立てることを拒んだ。

「い、いやっだ、そ、そんなボク、入れないでえっ……！」

俺は、くぱあと開いた穴に、ずぶりと剣を差し込むと、より多くの血と臓物を求めて、身体からだの中で激しく剣を振った。俺は、トカゲが前屈みに崩れ落ちると、体ごと背中へと突き抜けた。

さすがのシャーロットも剣技の連続発動は、負担が大きかったようだ。反応の鈍くなった彼女は、血量を伴う臓物を頭から浴びても、荒い息遣いのまま、崩れたトカゲに三斜目を要求してこなかった。醜悪の極み。

「フェルミ、気持ちいいかい？」

「う、うん・・・気持ち良いよ」

と、フェルミが言う俺は、単調な戦闘の繰り返しで高みを目指すことが、難しいと悟った。

「やはり、テクニックを磨く必要があるのか・・・」

俺が三匹目のトカゲに向きを変えると、小刻みな空気の揺れを感じた。ブオオオオッブオオオオッブオオオオッと、むず痒くなる振動だ。

「しめたぞ、司祭様の麻痺呪文だ！」

背後にいたトカゲの司祭は、杖を回しながら麻痺呪文を俺たち目掛けて放っていた。だが、麻痺無効の特赦効果を付加しているフェルミには、この小刻みな振動が、敏感なところを刺激して、堪らない気持ちがいらいらしい。腹の底にジンジンと響く緩急ある振動が俺たちを貫くと、戦闘に緩慢になっていた彼女たちが、一斉に喘ぎ声をあげて輝きを取り戻した。

敵に塩を送るような司祭の攻撃は、まだまだ未熟者の俺にとって有難い。そのまま彼女たちの敏感なところに、麻痺呪文を当ててほしい。これは、俺の焦りだ。

「剣技リターンズオータア！！」

俺は、次のトカゲとの距離を一気に駆け抜けて、剣を深く差し込むと股間まで引き下げた。

マスター・グラスマンは、オークより背が低いものの、身長二メートルのオークも、百九十センチのトカゲの長兄も大差がない。身長あまり高くない俺は、下から上への突上げる攻撃を身に付けていたが、無防備な下半身を晒すのを嫌がるフェルミの興を削いでしまふ。俺が、身長差二十センチのトカゲの長兄を上から攻撃するには、上段に構えて攻撃するしかない。ただ俺が上段に構えれば、やはり無防備な鎧を晒すことになる。

「負担の大きいジャンプ攻撃は、避けたいのだが・・・仕方ないか」俺は、ジャンプ攻撃からの浮遊感を好む、彼女たちの欲求に応えて、脚の付け根の痛みを我慢しながら大きくジャンプした。

俺は、トカゲの長兄の頭上に伸び乗ると、脳天に剣を突き刺して、喉から脊髄に向かって大きなモーシヨンで引き裂いた。トカゲの長兄は、恨めしそうな目で俺を見上げてから、ドサツと倒れ込んだ。倒れ込む瞬間に飛びのけた俺は、体が浮き上がるような感覚に支配された。

相変わらずトカゲの司祭は、俺たちに心地よい振動にしかならない麻痺呪文を続けている。

「お嬢さんたち、こいつを生け捕りにして、毎晩愉しむかい？」

「ボクは、アルがそうしたいなら・・・」

「馬鹿言わないでよ」

「俺の戦闘より何倍も気持ちいいんだろう？」

俺の嫉妬心から出た台詞は、彼女たちを萎えさせたみたいだが、もう十分に快楽を食ったはずだ。

意味のない攻撃を続けるトカゲの司祭は、なんだか気の毒でならない。

俺たちが戦闘を終えて、トカゲの死体から戦利品を剥いでいると、囃し立てる様な大勢の声が聞こえた。どうやら隣町までの乗合馬車の中から、俺たちの戦闘を観戦していた者がいたようだ。

「こつちに来て、武功を称えさせてくれ」

「その装備は、凄い美人だね」

「君は、見習いの騎士かい？」

観客たちは、安全な馬車の中から口々に賛美すると、俺の活躍に拍手を送ってくれた。

装備のままの彼女たちを「美人」と言ったのは、けしてお世辞ではない。乙女から精製される契約の装備を称える言葉は、「美人」が最上級の賛辞とされている。装備解除した乙女的美醜は、美人でなくても構わない。

「・・・あんな大勢に見られていたなんて、少し恥ずかしいです」
フェルミは、呼吸を整えながら言った。

俺は、装備を纏ったまま乗合馬車に近付くと、手を挙げて歓声に応えた。

「トカゲの家族を全滅させるとは、凄いじゃないか」

「ええ、そうですね」

褒められることに馴れていない俺は、頭を掻き揚げながら照れてしまった。

「冒険者になって何年目だい？」

「まだ、二か月目の初心者なんです」

「初心者で、あんなマニアックな戦い方をするなんて、ずいぶんと好き者なんだな」

「俺の戦闘は、マニアックですか？」

俺は、ほかの冒険者の戦闘を見ていなかったもので、何がマニアックなのかと聞いてみた。

「俺たちが通りかかったときアンタは、トカゲの腸に彼女を突き刺して、グルグルと掻き回していただろう。男も知らない乙女に、モンスターの血（青臭い）を浸み込ますような戦い方は、普通しない

よ」

「装備が血を好むんですよ。あの青臭さが好きみたいなんで・・・」
「装備から求めてきたなら、よほどマゾか、刺激に飢えた年増だよ」
「雑食のトカゲの臓物は、相当な悪臭だったろ？ 糞尿に塗れて悦ぶ装備なんて、俺たち『T』の刻印には、全く想像できないよ」
そう言って笑った彼らには、たぶん悪気があったわけではないと思うが、マゾとか、年増扱いされて、フェルミが不機嫌になった。
「スカトロ戦闘^{フレイ}を望んだのは、私じゃありませんよ」
「わ、分ってるよ・・・」

青臭さに夢見心地でいたシャーロットは、自分のことを言われたと思った。

「血の臭いには、興奮したけれど・・・ボクは、変態じゃないぞ」
「シャーロットは、ヒューヒュー悦んでいたではありませんか？」
「フェルミは、「うん、気持ち良いよ」って答えてた」

「二人とも俺が悪かったから・・・街に着いたらエラハイの元で修行して、もっとテクニクを磨くよ」

俺は、先ほどの戦闘で疲れており、二人の口喧嘩が煩わしかった。

「アンタたちも街まで行くなら、馬車に乗らないか？」

フェルミは、冒険者が安全を確保すべき、馬車での移動に反対した。街から街へと続く道は、冒険者にとって稼ぎを得る場所で、報奨金の一部が馬車組合の出資で成り立っているからだ。馬車は、冒険者が稼ぎを得るために守る物で、乗って楽に移動する物ではないとの持論があるのだ。

「それに馬車には、ほかの冒険者が護衛（仕事）のために乗車しているのよ。私たちが乗車したら、その冒険者に申し訳ないわ」

「べつに護衛（仕事）を横取りするわけではないから、気を悪くしないだろう？」

俺にも、彼女の言い分がよく解るのだが、ここ数日間、慣れない

ジャンプ攻撃を続けて痛めた腰は、彼女たちを支える歩くだけの余裕もなくなっていた。

「『鎧』のお嬢さん、ワシのことなら気にせず、後ろの荷馬車の護衛を頼むよ」

初老の冒険者は、乗合馬車の車列に付いてくる、荷馬車の護衛を依頼してくれた。定期運航されている乗合馬車は、客を運ぶ馬車と、荷物を輸送する荷馬車が車列を組んでいる。

「ワシからの仕事の依頼なら、遠慮することはないだろう？」

「は、はい。すみません、気を使って頂いて」

「ここから街までは、もう二、三時間で着くだろう。装備解除して、体を休めておきなさい」

俺は、『魔法剣』を持った右手を前に出すと、シャーロットと握手をした状態で装備解除した。その様子を見ていた馬車の客たちは、彼女の想像以上の美しさに言葉を失った。契約者の装備解除は、一般的に目にする機会がないので、契約者でない『Tr』からすれば、それだけでも息を呑むシーンだ。

「び、びつくりしたな・・・本当に、美人さんで驚いたよ」

彼らの前で装備解除したのは、俺たちの戦闘を褒めてくれた観客へのカーテンコールだ。

シャーロットは、自分のプレイを見られていたことに、照れくささを感じていたが、彼らの称える言葉に、軽く手を振って応えた。

「あんな娘と契約が出来る契約者は、本当に羨ましい」

「戦闘中は、どんな感じなんだい？」

彼ら『Tr』は、戦闘中の彼女が快感を得ていると知っているが、実際にどんな様子なのか経験することがない。だからこそ、余計に興味津々なのだろう。

「どんな？ 剣^{ボク}の場合は、ふわツとしたり、グツとされたり・・・」
おいおい、素直に答えないでよろしい。

彼らの期待は、自ずとフェルミの装備解除に集まった。太陽の光に輝く純白の鎧は、そぞかし美しい女性になるに違いないと、そう考えているのだろう。だが鎧の装備解除は、駅弁スタイルのため披露するに下品過ぎると、フェルミが頑なに拒んでいた。

「もしかして、鎧の女は・・・」

なかなか装備解除しない俺たちに、客がフェルミの容姿に疑いを持ち始めた。

「鎧は、人前での装備解除が恥かしみたいなんで、悪いけど目を閉じてもらえますか？」

客が面倒くさそうに、俺の指示に従った。

「そんなことまでして、彼らに気を使う必要はありません」

「違うよフェルミ。俺は、フェルミの美しさを大勢の人に知ってもらいたいんだ」

「・・・そういうことなら」

俺たちは、馬車に背を向けて装備解除した。

「はい、どうぞ！」

俺は、フェルミを前に立たせると、鈍臭い手品師のように、美しい彼女を披露した。

「おおおお、剣にも負けず劣らず、美しいお嬢さんだ」

「あ、あんな綺麗な娘二人が、あんな戦闘を・・・」

「汁塗れの美少女とは・・・なんで俺の刻印は、『Tr』なんだよ
お」

「俺も、あんな娘（剣）に（を）ブチ込んでみてえよ」

お前らは、どんな想像をしてるんだ？

俺は、荷馬車の御者に挨拶を済ませてから、フェルミたちが先に待つ荷台へ向った。

「アル！ 聞いてくれよ。フェルミは、ボクのことを変態扱いするんだ」

「だってシャーロットは、あんな青臭い液体が甘いなんて言うんですよ」

「違うよ、甘く感じるときもあるよね？ って、聞いたただだよ」

「苦いです。喉越しも最悪です。シャーロットは、美味しいだなんてヘンタイさんですわ」

「ボクは、美味しいなんて一言もいってないよ・・・」

装備の彼女たちに味覚があるとは、どこで味を感じているのか、俄かに信じられない話した。

「まあまあ、二人とも不味いなら無理に飲むことないよ」

「体液を飲み込むよう強要したのは、そもそもアルでしたよ」

「嫌がるボクらに体液を飲ませたのは、アルじゃないか！」

俺は、後方監視を彼女たちに言いつけると、旗色が悪くなる前に御者のところに逃げ出した。

「なんだよ、二人とも悦んでいたクセに」

御者の男は、俺が前に戻ると、隣に座らせていた女を両手を広げて慌てて隠した。

「な、なんだよ旦那は、荷台から護衛するんじゃないのか」

「連れが喧嘩の真っ最中で、前に逃げてきたんだが・・・」

俺が座ろうと思っていた空席に、腰を下ろしていた女は、黒皮のチューブトップとミニスカート、膝まであるロングブーツを履いており、素人女に見えなかった。しかし身の丈は、未成年と勘違いしたユングよりも低く、ピンク色に近い赤毛は、幼さを漂わせている。顔を大きく隠したサングラスは、大人びた服装に比べて、どこか幼

稚なセンスだ。

「この女は、俺の知り合い・・・って言っても、飲み屋の女だけど、無賃乗車なんだよ。ここに座っていいから、このことを見逃してくれ」

御者の男は、飲み屋のホステスにせがまれて、金も取らずに隣町まで乗せているらしい。本来なら護衛である俺は、見逃すことが出来ないのだが、護衛役は正式な依頼ではなかったし、俺自身が好意に甘えて乗せてもらった身だ。

「解ったけど、街の手前で女を降ろせよ」

御者の男は、もとよりその考えだと頷くと、俺のために席を寄せてくれた。

俺は、間近で女の顔を覗き込むと、サングラスに透けた細い瞳が俺を覗き返した。

彼女は、服装こそ大胆な装いだが、八重歯の可愛い普通の女の子に見える。

「アンタは、冒険者なのかにゃ？」

うん？　なんか聞きなれない方言に俺は、首を捻って聞き直した。

「アンタは、冒険者なのかと聞いているのにゃ」

「ああ、そうですよ・・・アンタではなく、アルフレッドと言います」

「名前なんか、どうでも良いにゃん」

世界って広いよな、どこの地方の方言だろう？

中部地方では、語尾が「みゃー」だと聞いたことがある、たぶん中部地方の女の子なのだろう。

「それよりアルは、何の適職を持ってるのにゃ？」

そう言つと彼女は、俺の太腿に手を置いて体を摺り寄せてきた。

不味いな・・・ここ数日、溜るだけ溜めてるから出ちやいそうだ。

契約者が適職を晒すのは、あまり好ましいことではなかったが、太腿に置かれた女の冷たい手に、思わず口から「剣士です」と出ちゃいそうだ。

「ミーコには、適職を明かせないのかにゃん？」

彼女の手は、次第に内腿を撫で回すようにクネクネと動き始めた。「ミーコ？ ああ、お名前ですね・・・」

ミーコを名乗る夜の女は、ピタリと手を止めて、続きをしてほしければ、適職を明かせと囁いた。

「剣士ですッ！・・・はうッ」

俺は、意志の弱い男です。

思っていたより、色々と弱い男でした。

臭いは、モンスターの臭いで誤魔化せそうですが。

「これ、働くことになっている店の名刺だにゃん。ミーコに会いたくなったら、いつでも来てにゃん」

俺は、ミーコから受け取った名刺を内ポケット仕舞い込むと、なんだかスツキリした気分になった。そして、一連のやり取りを見ていた御者の男は、俺に親指を立てたので、俺も親指を立てて応えた。

「そうか、それで荷馬車は・・・モンスターの臭いがしていたのか」

俺と商売女ミーコとの偶然の出会いとは、これから巻き込まれる大事件の予兆だったのかもしれない。ミーコこと本名ミアン・Leg・コーデアルは、契約者を渡り歩くネコのような女だった。

どうでも良いにゃん（後書き）

難しい娘^こ出しちゃったな・・・。
じつは魔・・・だから、次話に乞^こうご期待！

勇者なんて凄いにゃん

ほどなく荷馬車は、隣街の外壁が見える小高い丘まで辿り着いた。ここから街の入り口となる門までは、草木の生えていない荒涼とした大地が続く。街の周囲五キロほどは、モンスターの接近を監視するため、わざと野に火を放って丸坊主になっているのだ。

「ミーコさん、ここまで来ればグラスマンも現れませんよ」

御者の男は、荷馬車を止めるとミーコに降りるように言った。

「えゝつ、こんなところから歩くのゝ、モンスターに襲われたら困るにゃん」

「ですが、そろそろ日が暮れますから・・・ミーコさんなら大丈夫ですよ」

俺には、夜が訪れると何が大丈夫になのか解らなかったが、彼女は「仕方ないにゃん」と渋々従った。

「もう少し乗せてやれば良いだろう？」

馬に鞭を入れる御者の男は、手荷物一つで馬車から降りたミーコを無言のままに指差した。

振り返った俺は、彼女が大きく伸びをすると、サングラスを外した大きな目に、顔を出し始めた赤い月が反射して輝くのを見た。その瞳孔は、縦にスリットが入っており、まさに猫の瞳だった。

「お、おい、彼女は、いったい何なんだ？」

「旦那さん・・・ミーコは、本物の猫ですよ」
「猫？」

彼女は、俺と視線が合うと手を振った。

「二人とも起きろよ、街に着いたぞ」

ミーコの姿を見ていたはずの荷台にいた二人は、両手の指を絡ませて、寝息を立てていた。これは、口論の末に力比べ的なことをしたものの、戦闘の疲れからお互いに寝てしまったと、解釈すべきだろう。

「あ・・・おはよ」

シャーロットは、まだ眠い目を擦って荷台から降りてきた。

「おはようって、もう日が沈んでるぞ」

「ああ、おそよう?」

そんな挨拶があるものか。

彼女は、まだ寝ていたフェルミに声をかけると、エラハイの待つ街外れの教会へと歩き出した。

「七日間もお風呂に入ってないから、汗癬くて堪らないわ」

寝起きのフェルミは、自分の衣服が放つ異臭を気にして、ミント葉から抽出したオイルを襟元に吹きかけた。爽やかなはずのミントの香りも、汗に混じって重く感じる。

「そうかな? 毎日、ちゃんと体を拭いていたし、変な臭いはしないよ」

「シャーロットは、鼻が悪いのではないかしら?」

フェルミは、自分の持っていたミントオイルをシャーロットに手渡すと、俺に嫌われないように、脇の下に吹きかけておけと言った。シャーロットが「そ、そうだね」と、素直にフェルミの言うことに従ったのは、じつに可笑しかった。

自宅に浴室を持つフェルミは、少しの汗臭さも異臭に感じているようだが、二、三日に一度でも行水が出来れば贅沢だと言われる世界で、シャーロットぐらいの感覚でいる方が当り前だ。

何にせよ、二人が仲良く香水を分け合っているのなら、俺が余計な口を出す必要はない。

「ボクは、良い匂いがするかい?」

シャーロットは、俺の鼻に刻印を近付けたので「はいはい、良い

香りで良かったね」と、軽くあしらった。彼女は、満足したのか笑顔でフェルミに感謝していた。

「この街は、日が暮れても明るいな」

俺は、馬車の停留所の近くにあった、ランプのネオンが輝く歓楽街を見ていた。

停留所の付近には、訪れる旅人や、街を根城にモンスター退治を行う地回りの冒険者などを、相手にした宿屋や酒場が数多く集まっている。

「あんなところには、興味を持つてはいけません」

「俺たちは、成人しているんだから、酒場に興味が湧いても良いだろう？」

「お酒なら買って吞めば安くつきます。わざわざ店で吞むものではありません・・・それにアルは、成人式で酔払って、街の警備兵に補導されたことをお忘れですか？」

フェルミは、酒を吞むことが解禁される成人式で、俺が街のシンボル（馬の彫像）に跨って嚴重注意されたことを覚えていた。初めての酒の味は、確かに苦かったものの、冒険者の嗜好^{たしな}みとして覚えておきたいスキルだった。旅先で交す盃。

「南部では、冒険者同士で酒を酌み交わす風習もあるし、いつか必要になると思うんだ」

「では、ピンク酒場に行かないのであれば許可します」

ピンク酒場とは、普通の酒場と何が違うのだろうか？

「ボクらの街には、街条例で一軒も無かったけれど、禁欲を強いられている冒険者のために、女の子がお酌をしてくれたり、色んなサービスをしてくれる酒場のことだよ。店先の看板がピンクだから、ピンク酒場なんだ」

シャーロットは、首を捻っている俺に説明してくれた。

「しかし娼婦館は、法律で禁じられているから、街を出た村で非法に営業されるものだろう?」

「ピンク酒場は、その手のサービスを提供する店じゃないと思うよ。ボクら女性は、入店すら断られるから、どんなサービスなのか解らないけど、政府公認の酒場だよ」

彼女は、少し考えてから「ボクのお父さんは、常連だから詳しいよ」と、毎月隣町まで通っていると言った。

あのムツツリ魔法使いめえ、地下室に籠ってるくせにピンク酒場の常連なのかよ。

多くの装備と冒険をしていても契約者は、彼女たちに手を出すことが出来ない。禁欲生活が続く冒険者には、こうした息抜きの場所が用意されているのか。

「余計なことをアルに教えてはいけません、逆に興味を抱いてしまいうでしょう。ピンク酒場には、契約者との契約を狙っている田舎娘も大勢います。アルがお酒の勢いで、変な装備を持ち帰ったら困ります」

さすが幼馴染のフェルミ、俺のことなら何でもお見通しだ。

俺は、内ポケットからミーコにもらった名刺を取り出した。

押し花を漉き込んだ桃色の名刺には、店名と源氏名だけが書かれていた。

ピンク酒場『魔女の館』 ミーコ

俺たちの世界には、女性の魔法使いが存在しない。

ミーコの魔法とは、どんな魔法なのか、この街にいる間に調査の必要があると思った。

「あの猫娘、俺に魔法をかけやがったぜ・・・」

俺は、ゴワゴワする股間を押さえて呟いた。

隣街は、俺たちの街が『はじめの街』と呼ばれたように、若い冒険者が各々の目的を持って、各地に旅立つことから『旅立ちの街』と呼ばれている。

ある者は、武勲を欲してモンスターの巢窟『Land of Adventure』を目指し、ある者は、サウスファイア王国の守護のため各地に散って行く。

この街は、王都サウスファイアに次いで冒険者で溢れかえっており、夜の街も賑わいを見せている。

俺たちは、そうした雑踏に逆らうように街外れの教会に辿り着いた。

「よお少年、ずいぶんと待たせたじゃないか」

エラハイは、無精髭をあたりながら俺たちを玄関で迎えてくれた。部屋からは、シャボンの良い香りがした。

「もしかして、お風呂があるの？」

フェルミは、挨拶もせずに部屋を覗き込んで言った。彼女は、一刻も早く汗を洗い落としたかったのだろ。

「いま、エイミーとユングが入っているから、お嬢さんたちは、一緒に浸かって旅の疲れを落としておいで・・・アルは、俺が監視しておいてやるよ」

べ、べつに覗かねえよ・・・チツ。

エラハイは、フェルミたちを浴室に案内してから、俺が待っていた暖炉の前に現れた。

大きな窓の傍にある季節外れの暖炉には、スープが冷めないように槓の熾火が焚かれていた。

「俺たちの到着を知っていたのか？」

「まさか、アルが街を出たと知らせを受けて七日間、いつ到着しても良いように、ウチの嫁さんが用意してたんだよ」

と、エラハイが言う俺は、神父の結婚が禁じられていることを思い出した。

「神父は、生涯結婚が出来ないはずだろ？」

「俺は、教会の仕事を始める前に結婚していたからね。最近では、教会の戒律も緩くなっているんだよ。ウチの嫁ナルルは、教会で預かっている娘たちの世話で留守だから、明日の朝にでも紹介してあげよう」

エラハイは、椅子に腰かけてから、俺にも目の前の椅子を座るように言った。

「初めての旅を経験して、男同士でしか話せない話もあるだろう」

俺は、街を出てからの冒険談を聞かせて、自分の戦闘テクニクが未熟だったせいで、契約の装備の力を引き出せず悩んでいることを伝えた。

エラハイは、目標とする冒険者を思い描いて行動すると、自分の目指すスタイルに近付くと教えてくれた。最初は、スタイルから真似るのだと。

俺は、旅で出会った六人の装備と旅するビンセントのことを話し、彼のような冒険者になりたいと言った。

「アルは、『勇者になりたいビンセント』に会ったのかい？ 彼は、勇者の刻印を手に入れるために、幻と言われる契約の装備、アクセサリーの女を求めて彷徨う伝説の冒険者だよ」

「勇者の刻印だって！・・・勇者ってなんですか？」

俺は、勢いで驚いてしまったが、そんな刻印を見たことも聞いた

こともなかった。それに戦士のビンセントは、どんなに足掻こうと新たな刻印が刻まれることがないのは常識だ。

「勇者の刻印は、兜、鎧、籠手、盾、脚、武器の六人の契約を超えて、七人目のアクセサリーを身に付けた、フル装備の契約者に現れる刻印だと言いつたに聞かれています」

「でもアクセサリーは、突然変異的に誕生する契約の装備で、王都の騎士団長しか持っていないませんよね」

「おつ、良く知ってるね」

「では、騎士団長が勇者なんですか？ 彼が唯一のフル装備を手にした契約者だと、冒険学の授業で聞いています」

エラハイは、小さく首を振ると、もう一つの勇者の条件を教えてくれた。

「勇者の条件は、清い体（童貞）であることだ。妻帯者で子供のいる彼には、その条件が満たせなかったと言われている……まあ勇者が実在しないのだから、その条件すら眉唾だがね」

「勇者の刻印の力スキルって……」

「魔法使いを含めて、全ての契約者のスキルが手に入る」

俺は、旅の目的を見つけた気がした。

勇者ならば、俺も『鎧フェルミ』に見合う男になれる。

魔王を倒すならば、誰よりも強い男になる必要がある。

「俺は、まずビンセントのような冒険者を目指します。そしてフル装備となって、魔法討伐を果たしたいと思います」

エラハイは、目を大きく見開くと、涙を流して大笑いした。

「アルつ、そうか勇者になるのか？ 勇者は、アレとか我慢しなきゃなんのだよつ。神父のウチが言うのも変な話だが、女を連れて旅する冒険者の禁欲生活は、想像以上に辛い選択だよつ」

「そ、そうかもしれないけど、今回の旅路だって我慢してきたんだ。それにビンセントだって、けっこう年上だったのに我慢してきたん

だろう・・・俺だって、フル装備になるまで我慢できるさ」

エラハイは、俺の股間を指差してから、さらに大声で笑った。

「少年っ、小娘たちは騙せてもっ、お前の股間から臭うモンスター臭は、じつはモンスター臭じゃないことくらい、男のウチには、お見通しなんだぜっ。若いお前は、お嬢たちの喘ぎ声だけで、イッチやっただろうっ?」

「ち、違うよ! これは、荷馬車で乗り合わせた商売女に、無理矢理手でされたんだよ!」

俺は、自分の名誉を守るために声を張り上げて『声だけでイッた説』を完全否定した。

「商売女とは、ピンク酒場の乙女のことか?」

ピンク酒場キターーーー!

エラハイは、立ち上がると笑い過ぎてよじれた腹を伸ばすように、大きく伸びをした。

「そ、その冒険者として聞きたいのだが、ピンク酒場のサービスとは、どんなサービスなのか教えてくれないか・・・お師匠様」

先ほどシャーロットの説明では、核心に迫れなかった話を聞いた。教会では、子供を作らない性行為を禁じており、娼婦館を取締っているが、ピンク酒場で働く女たちは、全て刻印を持つ乙女だけと決められている。つまり清らかな乙女でなければ、ピンク酒場で働けない。教会は、欲求不満の捌け口のために、合法的な性風俗を許可しているんだよ」

なるほど乙女（処女）だけのピンク酒場では、子作りの真似事ができない。ヤッてしまえば乙女の刻印が消えて、すぐに本番行為を行ったと教会にバレてしまう。

「ピンク酒場とは、本番禁止の性風俗と考えていいのか?」

「中には、『永遠の乙女』と呼ばれる、刻印を刺青した偽乙女がいるから、本番行為がないとも言い切れないが・・・勇者を目指すな

ら気を付けないとつ、アルの純潔が汚されてしまつよつっ」

エラハイは、笑いを堪えきれない様子で言った。

「手は、ノーカウントなんだよな？」

俺の真剣な質問にエラハイは、腹を抱えて笑い出した。

「たぶん、ノーカンだろうっ、しかしアルが勇者を目指すのならば、適度な息抜きも必要だっ。荷馬車で出会った女の店に行ってみたら、どうだい？」

赤い月を見て姿を変えた猫娘には、俺も少なからず興味があつた。
「どうして、荷馬車の女がいる店を勧めるんだ？」

「ピンク酒場の乙女、いわゆるピンサ力嬢は、気に入った相手にしか性サービスを提供しないんだよ。名目上は、冒険者と契約をした乙女が、冒険者を接客して出会いを得る場として、政府からの営業許可を得ているからね。荷馬車で相手をしてくれた女ならば、店でのサービスも期待できる」

そうかピンサ力嬢のミーコは、俺の適職を気にしていたが、特定の適職者との契約を望んでいたのかもしれない。

「お師匠様、お願いがございます・・・明日の晩ですが、俺の装備にバレぬようにピンク酒場『魔女の館』に連れて行って頂けませんか」

「初めての冒険では、少年も色々と苦労しただろうから、息抜きのために案内してやろう」

俺は、エラハイに握手を求めると、彼は「童貞がうつる」と、手を引いて逃げた。

風呂上がりのシャーロットは、エイミーとユングに連れられて、俺たちが話していた暖炉の部屋にやってきた。彼女たちは、濡れた

髪をタオルで乾かすと、スープとパンで夕食の準備を始めた。

「フェルミは、まだ風呂なのか？」

と、俺が言うとエイミーは、いやらしい顔をして、

「彼女は、ずいぶん熱心に体を洗っていたわよ、久々にベッドで寝るんですもの、何か期待してるんじゃないのかしら」

と言った。

「少年は、勇者を目指しているらしいぞ」

「坊やは、勇者になるの・・・童貞がうつる」

エイミーは、指で十字を切りながら笑ったが、契約の装備（処女）は、俺と同類だろうがぁ！

「笑い声が浴室まで聞こえてきましたけど、男同士で何を話していたのですか？」

風呂から上がったフェルミは、金髪の髪を櫛で梳かしながら、笑いを噛み殺しているエラハイに聞いた。彼女からは、清々しいミントの香りがした。

「彼のバトルスカートは、モンスター臭が酷いって話だよ」

フェルミは、俺の下半身に顔を近付けると、クンクンと鼻を鳴らした。

「そうかしら？　むしろマロンケーキのような香がします」

そっちで来たか・・・。

栗の匂いだと聞いたシャーロットも、どれどれと俺の下半身を嗅ぎに飛んできた。

「ボクは、アルの匂いを嗅ぐと落ち着くよ」

シャーロット・・・俺の匂いとか言っちゃってるし。

お前ら知ってて知らんぷりかッ！

勇者なんて凄いにゃん（後書き）

シャーロット・・・orz

ビンセントが童貞だったとは・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9141x/>

へっぽこ剣士の俺が、チートな彼女を装備する

2011年11月4日05時31分発行